熊本県文化財調査報告第213集

伊坂上原遺跡
ワクド石遺跡
城ン原遺跡

―― 道路改築・整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ――

２００３.３
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第213集

伊坂上原遺跡
ワクド石遺跡
城ン原遺跡

２００３.３

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、国道325号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成12年度に伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡の調査を実施しました。菊池郡旭志村伊坂に所在する伊坂上原遺跡及び同川辺に所在するワクド石遺跡では、ともに古代の遺構・遺物のほか縄文時代の土器等が検出されました。

また、県道玉名立花線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成11年度に城ン原遺跡の調査を実施しました。玉名郡三加和町大字平野に所在する城ン原遺跡では、弥生時代から飛鳥時代の遺物が出土しました。

本報告書が埋蔵文化財とその保護に対する理解と認識を深める一助となれば幸いです。

埋蔵文化財調査に際しご協力いただきました菊池地域振興局・玉名地域振興局をはじめ、旭志村教育委員会・三加和町教育委員会及び各地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成15年３月31日

熊本県教育長　田 中 力 男

目　次

序文……Ⅰ
例言……Ⅱ
目次……Ⅱ
第Ⅰ部　伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 6
第Ⅲ章　調査の成果 …… 14
第Ⅳ章　まとめ …… 39
図版 …… 47
第Ⅱ部　城ン原遺跡 …… 65
第Ⅰ章　城ン原遺跡の概要 …… 71
第Ⅱ章　調査とその成果 …… 73
第Ⅲ章　分析 …… 84
報告書抄録 …… 86

例　言

1　本書は、国道325号道路改築事業に伴い事前に実施した埋蔵文化財（伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡）及び県道玉名立花線緊急地方道路整備事業に伴い事前に発掘した埋蔵文化財（城ン原遺跡）の発掘調査報告書である。

2　本書は２部構成をとり、第Ⅰ部を伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡、第Ⅱ部を城ン原遺跡の調査報告とした。

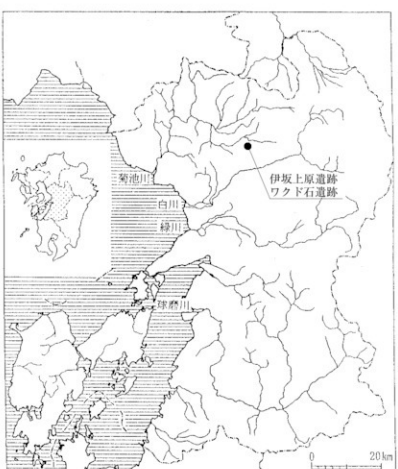
3　例言・凡例・目次は、本書全体のそれとは別に、各部にも付している。

4　本書の編集は熊本県文化課が行い、後藤貴美子・宮崎敬士が担当した。

5　出土遺物及び調査に係る成果品は熊本県教育委員会に帰属し、熊本県教育委員会がこれを保管する。

第Ⅰ部　伊坂上原遺跡
ワクド石遺跡

―― 国道325号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ――



例　言

1　本報告は、国道325号道路改築事業に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査（伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡）の報告である。
2　調査は菊池地域振興局から依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。
3　伊坂上原遺跡及びワクド石遺跡の発掘調査は平成12年度に実施し、その整理・報告書作成は平成14年度に行った。
4　現地での実測及び写真撮影は後藤貴美子、下東嘉也が行った。遺構の製図は三宅由華が行った。遺物の実測は横山明代、乗富裕子、井島秀子、井上裕美、宮崎典子、松本裕子、後藤が行った。遺物の製図は三宅、松本が行った。遺物の撮影は後藤が行った。
5　当該遺跡の地形図は旭志村及び菊池地域振興局から提供を受けたものをもとにして作成した。
6　本報告の執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章を木崎康弘（一部後藤加筆）が、第Ⅲ章・第Ⅳ章を後藤が行った。
7　本報告の編集は熊本県文化課が行い、後藤が担当した。

凡　例

1　現地での実測図は以下の縮尺で作成した。
　遺構内の遺物出土状況…1/10　　溝・土坑・炉・ピット・不明遺構（硬化面）・土層断面…1/20　　遺構配置図…1/100
2　本書の作成の際には以下の縮尺とした。
　土坑・炉…1/30　　ピット…1/60　　伊坂上原遺跡遺構配置図…1/300
　ワクド石遺跡遺構配置図…1/200　　土器…1/3　　石器…2/3、1/2
3　遺構の方位は真北である。
4　写真のスケールは紙面の都合で任意とした。
5　第Ⅱ章で示した周辺主要遺跡分布図及び主要遺跡名については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。
6　「第Ⅲ章　調査の成果」中におけるアミフセは以下の範囲を示す。
　赤色顔料　　ススの付着　　黒色土器の黒化処理
　また、須恵器の断面は　　で示した。
7　その他の凡例については挿図ごとに付した。

目　次

例言……i
凡例……i
目次……ii

本　文

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　調査の方法……2
第Ⅱ章　遺跡の概要
　第１節　遺跡の環境……6
　第２節　遺跡の概要……12
　第３節　層位と包含層……12
第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　伊坂上原遺跡……14
　第２節　ワクド石遺跡……28
第Ⅳ章　まとめ
　第１節　伊坂上原遺跡……39
　第２節　ワクド石遺跡……39
　第３節　古代における伊坂上原遺跡とワクド石遺跡……39
図版……47

挿　図

第１図　周辺地形図……3
第２図　伊坂上原遺跡調査区位置図……4
第３図　ワクド石遺跡調査区位置図……5
第４図　周辺主要遺跡分布図……7
第５図　伊坂上原遺跡昭和57年度調査区位置図…10
第６図　ワクド石遺跡平成３年度調査区位置図…11
第７図　周辺地形略図……14
第８図　伊坂上原遺跡遺構配置図……15
第９図　伊坂上原遺跡土坑（S322）実測図　……16
第10図　伊坂上原遺跡溝（S295）実測図　……17
第11図　伊坂上原遺跡土坑（S001）実測図　……18
第12図　伊坂上原遺跡土坑（S006）・
　炉（S201・202・227）実測図　……19
第13図　伊坂上原遺跡土坑（S219）実測図　……20
第14図　伊坂上原遺跡土坑（S219）
　出土遺物実測図……21
第15図　伊坂上原遺跡ピット配置図　……22
第16図　伊坂上原遺跡掘立柱建物（S267）
　実測図……23
第17図　伊坂上原遺跡炉（S201・202）

及びピット出土遺物実測図……24
第18図　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（1）……25
第19図　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（2）……26
第20図　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（3）……27
第21図　ワクド石遺跡遺構配置図……29
第22図　ワクド石遺跡溝（S001・002）実測図……30
第23図　ワクド石遺跡土坑（S003・007）実測図……31
第24図　ワクド石遺跡炉（S004）実測図……32
第25図　ワクド石遺跡炉（S004）出土遺物実測図……33
第26図　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（1）……34
第27図　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（2）……35
第28図　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（3）……36
第29図　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（4）……37
第30図　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（5）……38

表

第1表　周辺主要遺跡地名表……8
第2表　伊坂上原遺跡土器観察表……41
第3表　ワクド石遺跡土器観察表……44
第4表　伊坂上原遺跡石器観察表……46
第5表　ワクド石遺跡石器観察表……46

図　版

図版1　伊坂上原遺跡……49
図版2　伊坂上原遺跡出土遺物（1）……50
図版3　伊坂上原遺跡出土遺物（2）……51
図版4　伊坂上原遺跡出土遺物（3）……52
図版5　伊坂上原遺跡出土遺物（4）……53
図版6　伊坂上原遺跡出土遺物（5）……54
図版7　伊坂上原遺跡出土遺物（6）……55
図版8　伊坂上原遺跡出土遺物（7）……56
図版9　ワクド石遺跡……57
図版10　ワクド石遺跡・出土遺物（1）……58
図版11　ワクド石遺跡・出土遺物（2）……59
図版12　ワクド石遺跡・出土遺物（3）……60
図版13　ワクド石遺跡・出土遺物（4）……61
図版14　ワクド石遺跡・出土遺物（5）……62
図版15　伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡出土石器（1）……63
図版16　伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡出土石器（2）……64

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の経緯

熊本県教育委員会では、文化財保護法の趣旨の下、関係事業部局の理解と協力を得て、実施事業の照会を行い、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのある各種事業の把握に努めている。把握した各種事業については、遺跡地図照合や現地踏査を実施して、埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するとともに、文化財保護法上、必要な手続きや試掘調査や確認調査の実施について協力を求める旨の協議を行っている。

なお、試掘調査や確認調査は、関係事業部局の依頼の下、保存方法検討の参考とするために実施するものである。

今回報告する国道325号道路改築事業に伴う伊坂上原遺跡とワクド石遺跡の発掘調査でも同様の手順で調整を図ってきた。その具体的な経過を時系列的に整理することとしたい。

①　実施事業の照会から遺跡地図照合等の実施

熊本県教育委員会は、平成７年10月26日付け教文第1094号で平成８年の実施事業について菊池土木事務所長あて照会を行った。この照会を受けて、菊池土木事務所長は、平成７年11月17日付け菊土第1036号で実施事業について熊本県教育長あて回答を行った。熊本県教育委員会では、遺跡地図照合と現地踏査を実施し、回答のあった事業地が埋蔵文化財包蔵地「伊坂上原遺跡、ワクド石遺跡等」に該当するため、ａ文化財保護法上の手続きが必要となること、ｂ確認調査の実施について協力を求めたいことを通知した（平成８年５月22日付け教文第373号）。

②　確認調査の実施

熊本県教育委員会は、平成11年４月５日付け菊土第61号で菊池土木事務所長から依頼を受けて、伊坂上原遺跡及びワクド石遺跡の確認調査を２回に分けて実施した。伊坂上原遺跡の確認調査は、文化課文化財保護主事村崎孝宏が担当となって、平成11年４月26日に実施された。ワクド石遺跡の確認調査は、文化財保護主事廣田静学、嘱託田中智宏が担当となって、平成11年８月12日から８月13日まで実施された。調査の結果、古代の遺物、土坑（伊坂上原遺跡）と縄文土器（ワクド石遺跡）が出土し、埋蔵文化財の包蔵を確認した。このため、平成11年５月12日付け教文第234号及び平成11年９月２日付け教文第32号により、事業の実施に当っては本調査が必要な旨、菊池土木事務所長あて通知を行った。

③　本調査の実施

熊本県菊池地域振興局長は、平成12年５月15日付け菊土第35号により、熊本県教育長に対して伊坂上原遺跡の本調査の実施を依頼した。熊本県教育委員会では、この依頼を受けて、速やかに本調査の体制を整備して対応することとした。主管課は、文化課である。本調査の期間は、伊坂上原遺跡が平成11年８月24日から11月10日までで、ワクド石遺跡が平成11年９月４日から11月９日までである。調査対象面積は、伊坂上原遺跡が約1,200㎡で、ワクド石遺跡が約180㎡である。

次に、本調査の進行を簡単にまとめてみよう。

伊坂上原遺跡

＜８月＞

24日に南側半分の表土剥ぎを開始し、28日に終了した。その後、調査区の清掃を実施しながら、遺構の検出を行った。

＜９月＞

多数の穴を検出し、順次掘り上げ、平面図を作成した。穴の数99基である。

＜10月＞

10日に残りの部分（北側半分）の表土剥ぎを開始し、12日で終了した。表土剥ぎ後、調査区の北側から東側にかけての部分は土取りのため大規模に掘削したり産業廃棄物を埋めたりして遺跡が消滅していることがわかった。それらの撹乱土除去作業についても主にバックフォーを使用した。13日に実測用の杭打ち。遺構としては19日に竪穴２基の実測を完了した。20日に土器の集中箇所（S219）を確認した。

＜11月＞

6日、7日に駄目押しの試掘坑を設定し、掘削を行った。遺構・遺物ともに認められず、終了とした。10日、残務整理後、撤収を行った。

ワクド石遺跡

＜9月＞

4日に表土剥ぎを開始し、6日に終了した。表土剥ぎ後直径1m程度の穴が整然と並んでいたが、販売用の樹木を植え込んだ穴の跡（以下植木穴）であった。11日に実測用の杭打ち実施。併行して、調査区の清掃と遺構検出を行った。25日、植木穴中から多量の土師器が出土した。

＜10月＞

9月に引き続いて、遺構と考えるものを掘削した。10日に竈らしい遺構を検出したが、13日に竈ではないかという指摘をもらった。

＜11月＞

竈跡周辺の調査を継続、その他の遺構の調査も実施した。9日に、残務整理を行った後調査を終了した。

第2節　調査の方法

伊坂上原遺跡

廃土置き場の関係上、調査期間の前半を南半分の調査に、後半を北側半分の調査に充てた。表土剥ぎではバックフォーを利用した。その後、道路用杭を利用して5mグリッドを設定した。場所を指定するためのグリッドの呼称は、南東隅を起点に、北へ1～13、西へA～Eとし、その組み合わせとした。

調査の手順は、次の通りである。まず表土剥ぎ、精査（清掃及び遺構確認）を行った。その後、遺構掘削、遺構実測（平面図、断面図の作成）、写真撮影を繰り返し、最後に駄目押し掘削で終了とした。

ワクド石遺跡

表土剥ぎではバックフォーを利用した。その後、道路用杭を利用して5mグリッドを設定した。場所を指定するためのグリッドの呼称は、北東隅を起点に、南へA～G、西へ1、2とし、その組み合わせとした。

調査の手順は、伊坂上原遺跡と同じである。

なお、本調査、報告書の実施に当っての組織は、次のとおりである。

●確認調査（平成11年度）

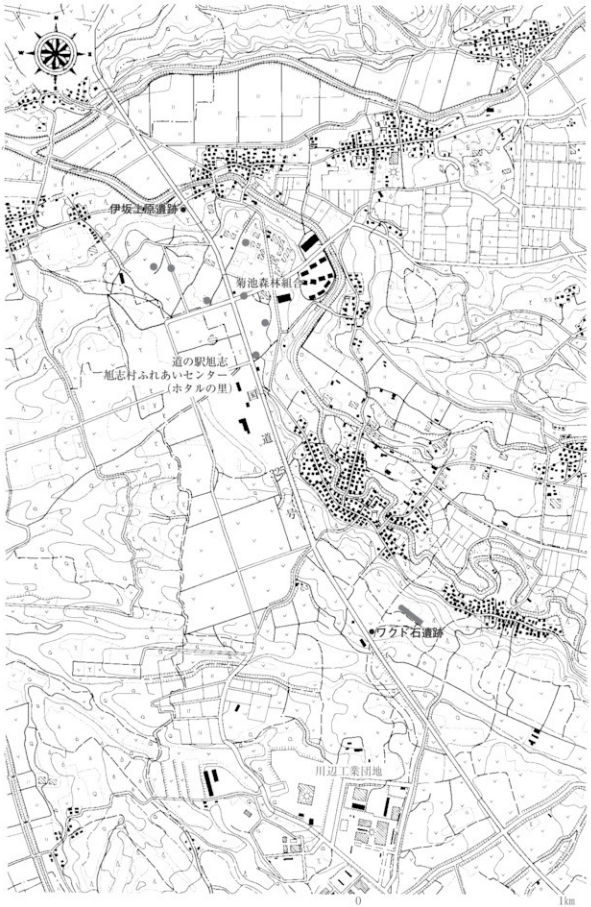
調査責任者	豊田貞二（文化課長）
調査総括	川上康治（課長補佐）
	島津義昭（課長補佐）
調査調整	江本　直（主幹兼文化財調査第2係長）
	村崎孝宏（文化財保護主事）
調査担当	村崎孝宏（文化財保護主事）
	廣田静学（文化財保護主事）
	田中智宏（嘱託）
調査事務	小斎久代（総務係長）
	広瀬泰之（参事）
	川口久夫（主事）

●本調査（平成12年度）

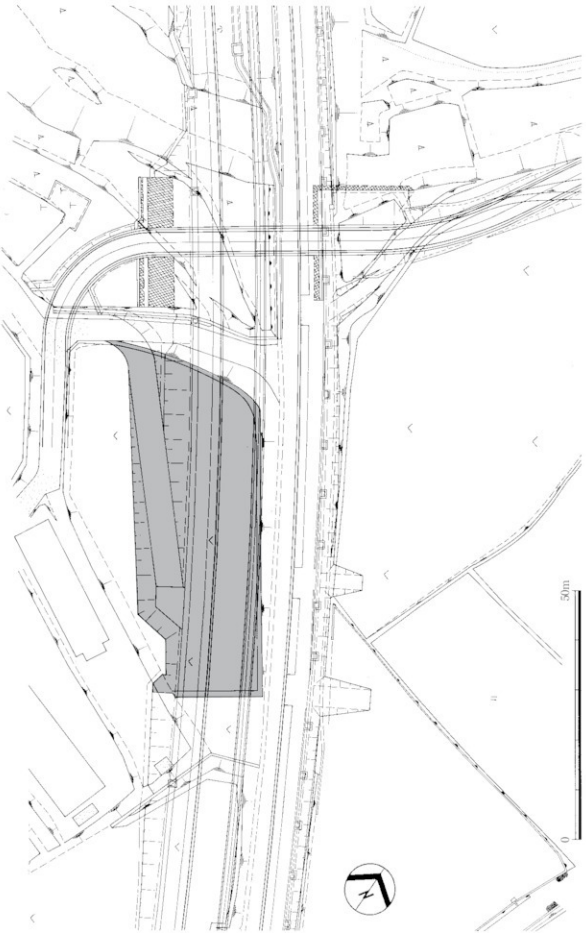
調査責任者	阪井大文（文化課長）
調査総括	川上康治（課長補佐）
	島津義昭（課長補佐）
調査調整	江本　直（主幹兼文化財調査第2係長）
	村崎孝宏（文化財保護主事）
調査担当	後藤貴美子（文化財保護主事）
	下東嘉也（嘱託）
調査事務	中村幸宏（主幹兼総務係長）
	広瀬泰之（参事）
	杉村輝彦（主事）

●整理・報告書作成（平成14年度）

調査責任者	成瀬烈大（文化課長）
調査総括	小田信也（教育審議員兼課長補佐）
	島津義昭（教育審議員兼課長補佐）
調査調整	木崎康弘（文化財調査第2係長）
	亀田　学（主任学芸員）
調査担当	後藤貴美子（文化財保護主事）
	三宅由華（嘱託）
調査事務	中村幸宏（主幹兼総務係長）
	天野寿久（主任主事）
	杉村輝彦（主事）



第１図　　周辺地形図（●は昭和57年度・平成３年度調査区）



第２図　伊坂上原遺跡調査区位置図

第３図　　ワクド石遺跡調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

阿蘇は、37～26万年前、15万年前、10万年前、8万年前と大噴火を繰り返しながら、その様相を様変わりさせてきた。そして、それ以後、中央火口丘の形成等を経て、今日に至っているそれが、現在のカルデラ地形である。

さて、九州島は、地形的に大きく四つに区分される。すなわち、福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半の中部火山地域、宮崎県・熊本県南半の中部山地、そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の四地域である。特に、火山島である九州にあっては、中部火山地域と南部火山地域は、九州の地形を何らかの形で決定づけた火山地帯でもある。今回、報告する伊坂上原遺跡（402-016）は、これらの地域の中で中部火山地域に位置し、しかも、その中で北外輪山の麓近くにある。

阿蘇は、巨大なカルデラ式火山である。その容姿は、現在噴煙を上げている中央火口丘、肥沃な低地及び外輪山によっている。中央火口丘は、今でも生き続け、信仰の対象となっている火口を中心に「仏の涅槃像」と称された山容を呈し、雲海の上に浮かぶことがある。また、中央火口丘や外輪山上から展望する低地もまた、多量の水を含んで、四季折々の色を変えて絶景である。さらに、外輪山は、広大な草原とたくさんの渓谷を湛えている。

一方、外輪山は、宮崎県や大分県にもまたがる、広大な丘陵でもある。外輪山からのびる尾根線は、しだいに傾斜を緩くしながら、あるものは高原地帯へ、あるものは平地部の台地へとつながっていく。

伊坂上原遺跡やワクド石遺跡は、この外輪山を源とする合志川の流域、その支流である矢護川の左岸台地上にある。伊坂上原遺跡は矢護川と合志川の合流点近くに、ワクド石遺跡はやや上流部に位置している。この矢護川の流れは、合志川と合流した後、さらに下流で菊池川に合流する。そして、菊池・山鹿という２つの盆地を貫流して、玉名平野に至り、その後、有明海へと注ぎ込むのである。その過程で、流れは次々に変化して、下流へ、下流へと至る。伊坂上原遺跡やワクド石遺跡は、そのもっとも初現的な地に位置している。

２　歴史的環境

伊坂上原遺跡（402-016）やワクド石遺跡（403-002）の周辺では多くの遺跡が発見されている。特に、縄文時代以降の遺跡は多く、その内容も豊富である。以下、旧石器時代を手始めに、時代ごとの簡単な紹介を行っていきたい。

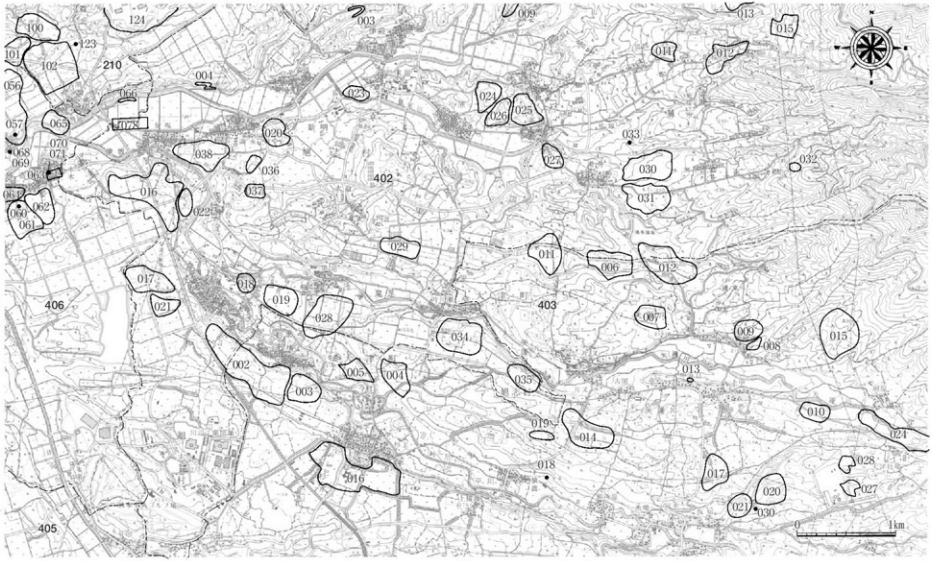
旧石器時代

旭志村湯舟原遺跡（402-027）がある。遺跡では、ナイフ形石器と三稜尖頭器が表面採集されている。無田原遺跡（403-006）では、旧石器時代の石器が発掘されている。また、阿蘇の外輪山上では、大矢野原遺跡群や菊池川上流域遺跡群、阿蘇外輪北麓遺跡群からは、遺跡が多数発見されている。

縄文時代

早期から晩期まで、多くの遺跡が確認されているし、その調査例もある。時期ごとに遺跡を挙げていこう。

早期では、大津町瀬田裏遺跡、中後迫遺跡（403-027）、大津町～旭志村ワクド石遺跡（403-002）、大津町～旭志村無田原遺跡（403-006）で発掘調査が行われている。瀬田裏遺跡は、押型文土器の時期の長方形石組み遺構や配石遺構、石組炉、集石などが多く検出された遺跡として全国的に著名である。また、注口を持つ壺形の押型文土器が出土したことでも広く知られている。この他、多量の土器や石器に混じって、いわゆるトロトロ石器や男性器形石製品なども出土していて、遺構の数や内容、遺物の数や内容から、この周辺の拠点的な遺跡である可能性が高い。また、中後迫遺跡（403-027）でも多量の遺構や遺物が出土していて、拠点的な遺跡の可能性が高い。ただし、その内容が前記した瀬田裏遺跡のも



第 4 図　　周辺主要遺跡分布図

第１表　　　周辺主要遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
402－003	松尾横穴群	伊萩　松尾	古墳	古墳		約60穴、須恵器
402－004	土平横穴群	弁利　土平	古墳	古墳		
402－009	藤尾支石墓群	弁利　藤尾	弥生	埋葬	県	十数墓
402－011	狐塚	籠　狐塚	歴史	蔵骨器		歴史・蔵骨品・鉄板
402－012	桜ヶ水	籠　桜ヶ水	縄文	包蔵地		曽畑式、石斧・槍・鉄・石刃
402－013	たばこ石	籠　たばこ石	縄文・弥生	包蔵地		御領式土器・野辺田式土師器
402－015	伏石	籠　伏石	縄文	包蔵地		阿高式土器
402－016	伊坂上の原	伊坂　上の原	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式土器　＊注１
402－017	ヒララ石	川辺　柏木	縄文・弥生	包蔵地		磨消、縄文支石墓、石斧
402－018	四郎丸	川辺　小が原など	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式土器
402－019	西鶴	尾足（通称西鶴）	縄文・弥生	包蔵地		
402－020	高永	新明　高永	縄文・古墳	包蔵地		御領式・須恵器
402－021	柏木	川辺　柏木	縄文・弥生	包蔵地		磨消縄文・御領式
402－022	西原	川辺　西原	縄文	包蔵地		曽畑式・阿高式土器・須恵器
402－023	古宮	新明　妻越	縄文	包蔵地		押型文
402－024	平山古墳	籠　高柳	古墳	古墳		円墳、箱式石棺
402－025	北受	籠　北受	縄文・古墳	古墳		押型文、箱式石棺
402－026	高柳	籠　高柳	弥生	包蔵地		須玖式
402－027	湯舟原	籠　湯舟原	弥生	包蔵地		須玖式・黒髪式
402－028	尾足原	尾足　南原	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式
402－029	松ヶ平	新明　松ヶ平	縄文	包蔵地		縄文、御領式
402－030	五十町	籠　五十町	縄文・古墳	古墳		御領式・野辺田式、箱式石棺、石刃
402－031	横道石棺群	籠　湯舟・横道	古墳	埋葬		
402－032	南桜ヶ水	籠　南桜ヶ水	縄文・他	包蔵地・埋葬		曽畑式・阿高式、石斧・石刃・槍
402－033	亀ヶ城跡	籠　湯舟	中世	城		
402－034	カメキュウラ	尾足　片川瀬	縄文～中世	包蔵地		
402－035	面ノ平	尾足　平山など	弥生・奈良	包蔵地		弥生、土師器、東路跡
402－036	前畑	新明　前畑	弥生・奈良	包蔵地		弥生、土師器、東路跡
402－037	栄ノ平	新明　栄ノ平	縄文～中世	包蔵地		
402－038	伊坂東原	伊坂東原	縄文～中世	包蔵地		
403－002	ワクド石	杉水　西の原ほか	縄文	集落		籾痕ある黒川式土器、翡翠製勾玉
403－003	塔の本	杉水　塔の本	縄文	包蔵地		押型文
403－004	今村	杉水　今村	縄文～古墳	包蔵地		西平式（御手洗Ｂ）・野辺田式土器
403－005	尾鶴	杉水　小迫・尾鶴	縄文～古墳	包蔵地		縄文晩期・土師器
403－006	無田原	矢護川　片又	縄文・弥生	包蔵地・埋葬	県	甕棺墓、配石遺構、縄文早期、押型・条痕文、黒曜石片
403－007	御領原	矢護川　御領原	縄文	包蔵地		縄文後期、西平式・御領式・野辺田式
403－008	馬糞塚古墳群	矢護川　御願所	古墳	古墳		箱式石棺墓、小円墳数基、人骨
403－009	七野尾	矢護川　七野尾	縄文・弥生	包蔵地		縄文（早・中・後・晩）、弥生・土師器・須恵器・石器
403－010	祝屋敷	真木	弥生	包蔵地		野辺田式土器出土
403－011	立石	矢護川　立石	縄文・弥生	埋葬		支石墓、甕棺墓・積石塚・環溝あり、積石塚６、石器
403－012	馬糞塚	矢護川　七野尾	縄文	包蔵地		縄文早期押型文、石槍・御領式、住居跡、鉄滓
403－013	九万石城跡	矢護川　中在目	中世	城		
403－014	一尾劄２地点	矢護川　一尾劄	古墳	包蔵地		古墳後期
403－015	向原	真木　向村	縄文・弥生	包蔵地		石刀、野辺田式、土師器・須恵器
403－016	杉水上ノ原矢鉾	杉水　上ノ原・矢鉾	縄文・弥生	埋葬		甕棺墓、支石墓、縄文、弥生土器・土師・須恵
403－017	ナギナタ	平川（通称ナギナタ）	縄文	包蔵地		条痕文、御領式・野辺田式
403－018	猿渡六地蔵	平川　猿渡	中世	石造物	町	
403－019	一尾劄１地点	矢護川　一尾劄	縄文	包蔵地		
403－020	水の山	矢護川　水の山	縄文	包蔵地		押型文、御領式・黒髪式・野辺田式、支石墓
403－021	平川仮宿	平川　水落	弥生・古代	包蔵地		
403－024	真木	真木	縄文	包蔵地		銅戈２本、国立博物館買い上げ
403－027	中後迫	古城　中後迫	縄文	包蔵地		押型文、塞の神式
403－028	日向	矢護川　日向	弥生	包蔵地		弥生中期後期土器片
403－030	陰獄城跡	平川	中世	城		
210－100	万太郎Ａ	赤星　万太郎	縄文	包蔵地		
210－101	万太郎Ｂ	赤星　万太郎	縄文	包蔵地		
210－102	城山	赤星　万太郎	縄文・弥生	包蔵地		
210－123	森北落水古墳	森北　落水	古墳	古墳		小円墳、石櫃ありと土俗いう、勾玉出土
210－124	森北立石	森北　立石	弥生	包蔵地		支石墓
406－056	城山	住吉　城山	縄文～古代	包蔵地		蔵骨器・条痕文・御領式・青磁・西平式・野辺田式
406－057	飛熊城跡	住吉　城山	中世	城		中世城
406－060	山王宮跡	住吉　北山王	中世・近世	包蔵地		寛永通宝・土師器杯
406－061	東駄飼城	住吉　東駄飼城	古代	包蔵地		蔵骨器
406－062	南山王	住吉　南山王	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧・石匙・石鏃
406－063	上住吉	住吉　福島	古墳	包蔵地		土塁、土師器
406－064	池上城跡	住吉　古閑	中世	城		
406－065	飛熊	住吉　城下	古代	包蔵地		経筒
406－066	平町横穴群	住吉　上鶴	古墳	古墳		
406－068	華厳山広勝寺碑	住吉　北小路	中世	石造物	町	華厳山広勝寺境内
406－069	合志隆岑墓碑	住吉　北小路	中世	石造物	町	華厳山広勝寺境内
406－070	日頭山宣頓寺跡	住吉　福島	中世	寺社		仏像
406－071	合志家の墓	住吉	中世	墓地		
406－078	条里跡		古代・中世	生産		

402旭志村　403大津町　210菊池市　406泗水町　405合志町

＊注１「熊本県遺跡地図」には「伊坂上の原」とあるが、本書では既刊の報告書にならい「伊坂上原」を用いた。

のとは異なっているので、当時の集落の性格からすれば、この両者には何らかの性格の違いがあるものと思われる。

前期から中期にかけて、伊坂上原遺跡周辺では、大津町瀬田遺跡（轟B式）、同町中後迫遺跡（403-027）（曽畑式）、西原村桑鶴土橋遺跡（曽畑式）、旭志村桜ケ水遺跡（402-012）（曽畑式）、大津町日向遺跡（403-028）（曽畑式・阿高式）、旭志村西原遺跡（402-022）（曽畑式・阿高式）、同村南桜ヶ水遺跡（402-032）（阿高式）、大津町～旭志村ワクド石遺跡（403-002）（阿高式）、大津町七野尾遺跡（403-009）（阿高式）、合志町御手洗遺跡（船元式）がある。

この時期の遺跡は、その発見例が少なく、しかも大規模な遺跡が少ないのが特徴である。ただし、視点を宇城地方にまで拡大すると、例えば宇土市轟貝塚、同市曽畑貝塚ないしその隣接遺跡（多数の貯蔵穴が検出されている）、城南町阿高貝塚、同町黒橋貝塚、小川町大坪貝塚などの、貝塚遺跡を見出せるので、そうした観点で遺跡の所在を考えなければならないのかもしれない。

後期から晩期では、遺跡が多くなり、しかも大規模な集落が各所で見られるようになる。特に、後期末から晩期の前半では、その傾向が顕著である。例えば、大津町～旭志村ワクド石遺跡（403-002）、泗水町三万田東原遺跡、七城町大久保遺跡、旭志村伊坂上原遺跡（402-016）、菊池市天城遺跡は、その規模が大型のものである。中でも、ワクド石遺跡（403-002）、三万田東原遺跡、大久保遺跡では、土偶や玉類、それに土器作りを証明する焼成粘土塊が出土するなど、特徴的である。おそらく、拠点的な集落であろう。これに対して、伊坂上原遺跡（402-016）や天城遺跡では、前記した遺跡から出土するような土偶・玉類・焼成粘土塊は出土しない。集落の規模も前記したものと比べれば、やや小型となり、やや趣を異にした集落のようである。

晩期末、それは夜臼式土器が流行した時期であるが、無田原遺跡（403-006）の近くでも遺跡が確認されている。例えば、大津町水の山遺跡（403-020）は、当該期の支石墓としては、県内でも類数が少なく、著名である。ただし、集落遺跡を含め、それほど多くの遺跡がみられるわけではない。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡として、大津町～旭志村無田原遺跡（403-006）で甕棺が検出されている。弥生時代中期の遺跡として、特徴的なものは、銅鉾２本が出土した大津町大松山遺跡、甕棺墓の遺跡で須玖式が出土した合志町陳の内遺跡、高柳遺跡、中林西原遺跡、黒髪式の菊池市長田狐塚遺跡、合志町轟遺跡、両型式が出土した旭志村湯舟原遺跡（402-027）、泗水町富納遺跡、古閑原遺跡、合志町宮の原遺跡などがある。また、旭志村ヒララ石遺跡（402-017）、薗尾遺跡（402-009）、菊池市立石遺跡、大津町立石遺跡は、支石墓の遺跡である。

弥生時代後期の遺跡は多いが、調査された主な遺跡としては、旭志村伊坂上原遺跡（402-016）、大津町日向遺跡（403-028）、西弥護免遺跡、西合志町弘生原遺跡がある。中でも西弥護免遺跡の調査は、その集落のほぼ全域が対象となっている。

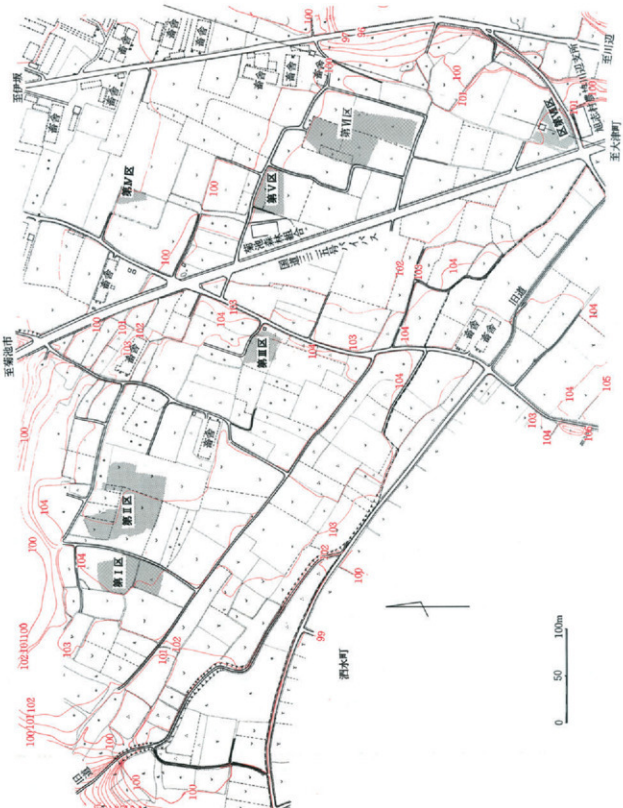
古墳時代

古墳時代の遺跡として、伊坂上原遺跡（402-016）の近くには、前方後円墳などの規模の大きい古墳はみられず、大津町馬養塚古墳（403-012）や旭志村尾足横穴群、岩下横穴群、松尾横穴群（402-003）など小円墳や横穴群はある。旭志村たばこ石遺跡、桜ケ水遺跡（402-012）、南桜ヶ水遺跡（402-032）、五十町遺跡（402-030）、大津町～旭志村ワクド石遺跡（403-002）、大津町瀬田裏遺跡など、阿蘇外輪山の裾野から麓にかけては、集落遺跡が小規模ではあるが多数分布している。その遺跡の性格を知る上でも、この周辺の遺跡をさらに詳細に知る必要があるようだ。

古代

奈良・平安時代の遺跡では、石製の帯金具が採集されている旭志村湯舟原遺跡（402-027）が著名である。遺跡は、河川の上流域近くに位置しているので、用水管理に関係する何らかの役所が存在していたと推定できる。

また、７世紀後半に築城したとされる菊鹿町鞠智城（382-100）は伊坂上原遺跡の北北西約８ｋｍのとこ



第５図　　伊坂上原遺跡昭和57年度調査区位置図（参考文献３より転載）

第６図　　ワクド石遺跡平成３年度調査区位置図（参考文献４より転載）

ろにある。現鹿本町から鞠智城の西南を通過し伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡に至る道筋には、古代菊池郡の郡衙関連施設である菊池市西寺遺跡（210-085）、七城町十蓮寺跡（401-007）をはじめ、9世紀ごろの集落である菊池市赤星福土・水溜遺跡（210-092）、経筒が出土した泗水町飛熊遺跡（406-065）があり、さらにワクド石遺跡の東方約3ｋｍのところにある旭志村面ノ平遺跡（402-035）では道路跡が検出されている。

伊坂上原遺跡の西方約7ｋｍのところには合志郡衙関連施設として七城町上鶴頭遺跡（401-037）、泗水町田島廃寺（406-010）がある。伊坂上原遺跡から田島廃寺方面に流れる合志川沿いには蔵骨器が出土した泗水町城山遺跡（406-056）、同駄飼域遺跡（406-061）、同むら吉遺跡（406-033）、鉱滓が出土した泗水町富田分カブト石遺跡（406-036）、合志郡家跡に比定される西合志町高木原遺跡（407-036）及び同合志郡家跡推定地（407-037）などがある。

第2節　遺跡の概要

1　伊坂上原遺跡の昭和57年度調査の概要

熊本県教育委員会は、昭和57年8月13日から昭和58年1月31日にかけて、県営畑地帯総合整備事業に伴い伊坂上原遺跡の発掘調査を実施した。調査面積は、24,000㎡であった。

調査の結果、第Ⅰ・Ⅱ調査区から縄文時代、弥生時代、奈良時代、平安時代の遺構・遺物を検出した。縄文時代では、三万田Ｂ式土器、鳥井原式土器、御領式土器及びそれらに伴う石器類や竪穴式住居跡、埋鉢などがある。弥生時代では、後期前半の竪穴式住居跡とそれに伴う土器等が出土した。奈良時代、平安時代では、竈付竪穴式住居跡17基、掘立柱建物跡5基が検出された。第Ⅳ調査区からは、竈付竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡1基が検出された。

2　ワクド石遺跡の平成3年度調査の概要

ワクド石遺跡は、刻目のある縄文式土器が出土した遺跡として全国的に著名である。遺跡の発見は、昭和6年10月に遡る。松永慧氏がこの遺跡を発見し、坂本経堯氏が縄文時代、弥生時代の遺跡であることを確認した。その後、坂本氏は、昭和7年3月25日と27日に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文式土器、打製石斧、磨製石斧、円盤形石器等が出土している。その後、川上勇輝氏は、浅鉢形土器の頚部内面に1つの刻目を確認して、その重要性を認め、『熊本史学』誌上に発表した（「爪の圧痕をもつ縄文末期の土器－菊池ワクド石出土の土器報告－」）。

一方、昭和53年、ワクド石遺跡がある台地一帯で県営農業基盤整備事業が計画された。その中で、平成3年度、ワクド石遺跡が調査対象となった。調査は、平成3年7月から平成4年4月30日まで実施された。調査面積は、8,000㎡であった。

調査の結果、縄文時代後期～晩期、古墳時代、奈良時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代後期～晩期は、太郎迫式土器、三万田式土器、鳥井原式土器、御領式土器、古閑式土器、黒川式土器の段階である。これらの土器に伴って、土製品（土偶）、石製品、打製石斧、磨製石斧、円盤形石器、十字形石器、石鏃、楔形石器、使用痕ある剥片などが大量に出土している。中でも、糸魚川産翡翠製の勾玉の存在は、注目されるもので、ワクド石遺跡の性格を評価するものである。

古墳時代では、5世紀前半の竪穴式住居跡が18基検出されている。調査者は、切り合い関係がないことから、比較的短期間に営まれ、廃棄された集落の可能性を指摘している。奈良時代では、竪穴式住居跡が6基、掘立柱建物が2基検出されている。報告者は、区画のための溝を伴った遺構群であることから、官衙的な性格を想定している。

第3節　層位と包含層

伊坂上原遺跡とワクド石遺跡では、共通した土層堆積が確認されている。具体的には、次のような土層である。

第Ⅰ層（表土・客土）

第Ⅱ層（黒褐色土）

黄色粒が混じる、しまりの弱い層である。やや粘

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　伊坂上原遺跡

１　遺構と遺物について

調査区のすぐ横を南北に走る国道は南から北へ向かって緩やかな傾斜をなしている。同様に今回の調査区も元来は緩傾斜地であったと考えられるが、土地を平坦に造成したらしく全体的に削平が顕著であった。加えて畑地として利用されていたため、耕作による撹乱も著しかった。

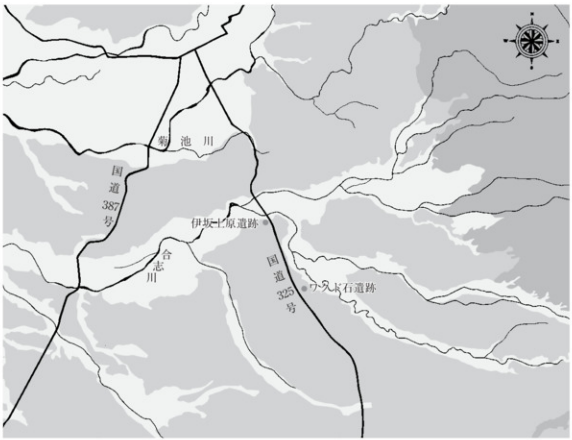
今回の調査で明確に遺構として確認したのは溝１条、土坑４基、炉３基、掘立柱建物１棟、ピット多数（約170基）である。掘立柱建物の有無についても現地で繰り返し検討したが、後述するＳ267を除いては１棟を構成する柱穴としてはばらつきがあるなどしたため、ピットは全体図として図化するに留めた（第８図）。但しＳ267周辺については別に図化することとした（第15図）。

遺構の時期はおおむね出土した遺物に拠っているが、遺物を含まない遺構については検出面または遺構面によりおおよその時期を推定した。また、遺構説明の順序としては遺物を伴った遺構として認識した古代の面を境として、それより下層から検出した遺構を「古代以前の遺構」とし、それと「古代の遺構」とに大別して述べることとする。

①古代以前の遺構

土坑（Ｓ322）

検出面はⅣ層直上である。ただし周辺は仮設道路か何かのように幅広く削られバラスが敷き詰められていたため、どの層から掘り込まれたのかはわからない。ややしまる内部の土をとりかこむように、壁際は約10cm の幅で内部よりややしまりの弱い土が堆積する。遺物は出土せず、炭化物の混入も見られなかった。用途は不明である。



第７図　　周辺地形略図（１：100,000）

第８図　伊坂上原遺跡遺構配置図

②古代の遺構と遺物

溝（S295）

調査区中央西寄りに位置する。単独で存在し、両端は削平される。幅60～90cm、検出面からの深さ約40cmを測る。埋土中に極微量の土師器細片が混入していたがその他に目立った遺物はなく、砂礫等も含まれなかった。

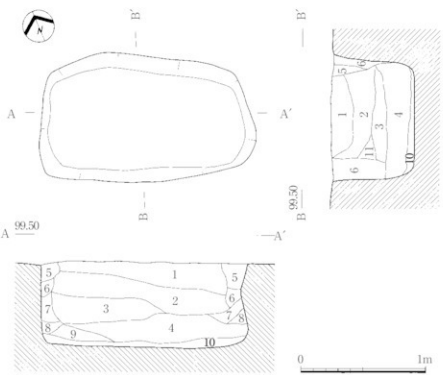
土坑（S001、S006、S219）

S001は調査区南東隅に位置する。南側及び東側は調査区外にかかり、西側の一部は削平される。平面形は長軸4.9m以上、短軸2.0m以上の楕円状を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る。ピットや硬化面、炉等は見られない。埋土はⅡ層に相当し、土師器片は含むが図化に耐えうる資料はない。

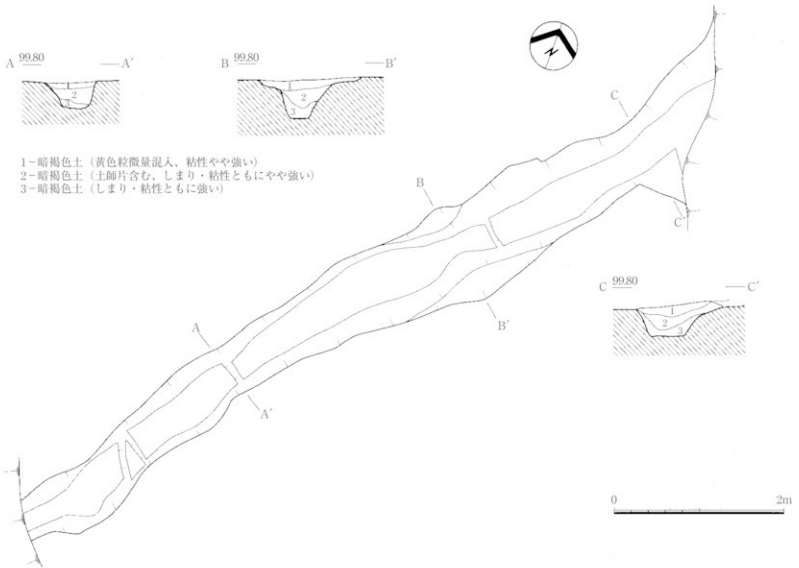
S006はS001より約1ｍ西に位置する。径約1.4ｍの円形を呈するが東側半分は削平される。検出面からの深さは約20cmである。本調査区ではイモ穴も多数有り、S006もその可能性を検討したが埋土の違い等により遺構と判断した。埋土はⅡ層に相当し、微細な土師器片は含むが図化に耐えうる資料はない。

S219は調査区のほぼ中央・西寄りに位置する。南西側は削平される。平面形は長軸2.6m、短軸約2.2mの楕円状を呈し、検出面からの深さは約60cmを測る。ピットや硬化面、炉等は見られない。埋土には炭化物や焼土、灰などが混入する。

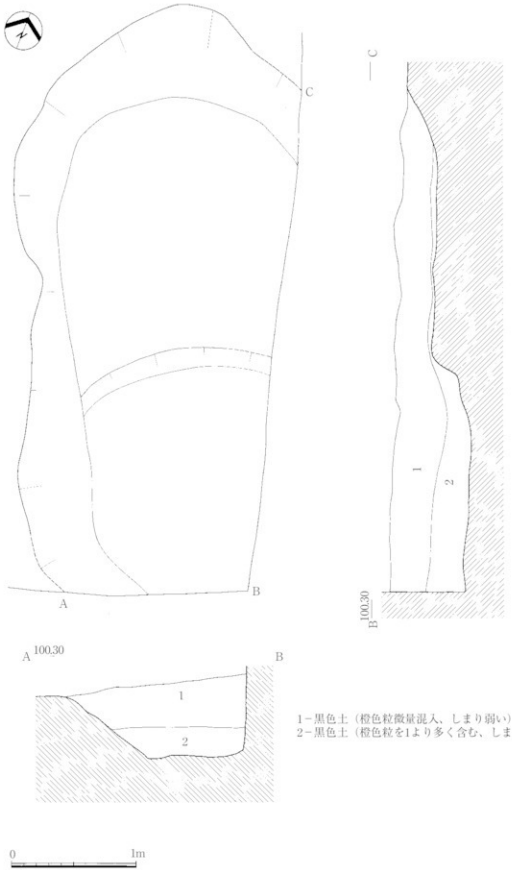
1～12はS219で出土した遺物である。1は土師器の甕である。底部を除いて、外面にはススが著しく付着する。内面は粗いケズリ調整である。2は土師器甕口縁部である。外面頸部直下にわずかに縦方向のタタキがみられるが横方向にナデ消される。3は須恵器甕口縁部である。外面は横方向のハケメ後ナデ調整がなされ、ヘラ描き文様が一部確認できる。外面は茶褐色の釉が、内面から口縁端部にかけては自然釉がかかる。4は須恵器甕胴部片である。外面は横方向の平行タタキのち部分的にハケメ調整、内面には同心円の当て具痕が残る。5～7は土師器坏である。5は底面を除く内外面に赤色顔料が確認できる。底面に、部分的に薄く墨の跡が残る。6は底部を含む外面に赤色顔料が確認できるが、内面は磨滅のため不明である。7は内外面とも磨滅するが、内面にわずかに赤色顔料が認められる。8は耳皿である。赤色顔料の有無は不明である。丁寧に指ナデ



第９図　　伊坂上原遺跡土坑（S322）実測図



第10図　伊坂上原遺跡溝（S295）実測図



1－黒色土（橙色粒微量混入、しまり弱い）
2－黒色土（橙色粒を1より多く含む、しまりやや弱い）

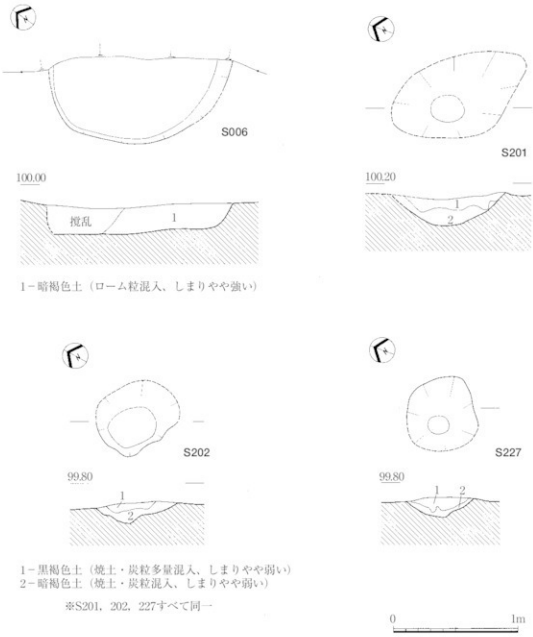
第11図　　伊坂上原遺跡土坑（S001）実測図

調整され、側面は工具で立ち上げられる。9は土師器坏である。特に外面の磨滅が激しい。10は黒色土器である。体部と高台を欠き、円盤状を呈する。11・12は須恵器坏である。これらの遺物はすべて流れ込みによるものであった。

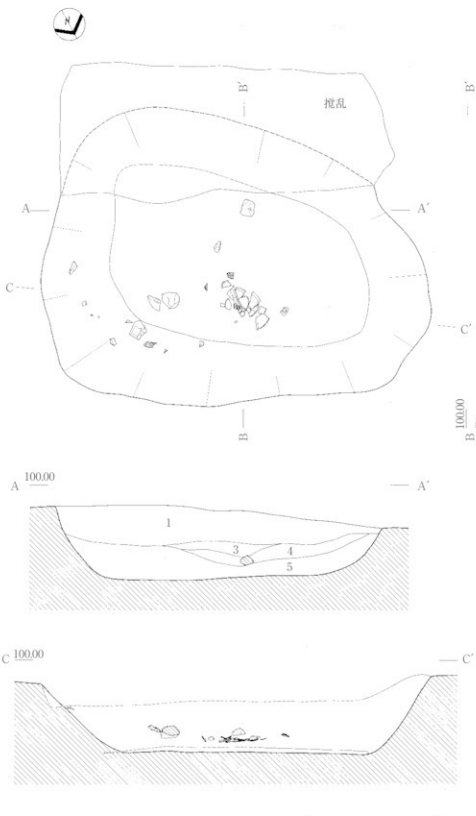
炉（S201、S202、S227）

S201は調査区北西隅に位置する。耕作により一部削平されるが、推定される平面形は長軸110cm、短軸70cmの楕円状を呈する。検出面からの深さは10～20cmである。炉はⅡ層を掘り込んで形成され、埋土は2層に分層される。

13はS201から出土した土師器坏である。内面の



第12図　伊坂上原遺跡土坑（S006）、炉（S201・202・227）実測図



1－暗褐色土
（灰・焼土・炭（1cm前後）多量混入、土師片含む、粘性やや強い）
2－灰黄褐色土
（灰多量混入、しまり弱く、粘性やや強い）
3－暗褐色土
（灰の混入なし、焼土、炭粒混入・しまり・粘性ともにやや強い）
4－暗褐色土
（炭・焼土・灰少量混入、しまり・粘性ともにやや強い）
5－黒褐色土
（焼土・炭少量混入、ニガブロック混入、しまり・粘性ともに強い）

第13図　　伊坂上原遺跡土坑（S219）実測図

一部に赤色顔料らしい跡があるが、全体に磨滅が激しく調整は不明である。

S202は調査区北端に位置する。耕作により一部削平されるが、推定される平面形は長軸50cm、短軸40cmの楕円状を呈する。検出面からの深さは約20cmである。炉はⅡ層を掘り込んで形成され、埋土は3層に分層される。

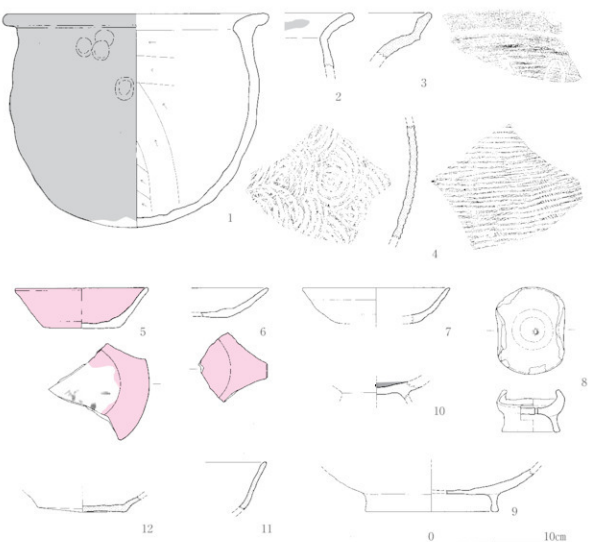
14・15はS202から出土した土師器坏である。2点ともほぼ完形で、底面にはともに板状圧痕が残る。

S227は調査区中央東寄りに位置し、溝の埋没後に形成される。耕作により一部削平されるが、推定される平面形は径約60cmの円形である。検出面からの深さは約20cmである。炉はⅡ層を掘り込んで形成され、埋土は2層に分層される。埋土に遺物は含まれないが、前述の2基の炉と検出状況・形状が似るため同様の時期と判断した。

ピット

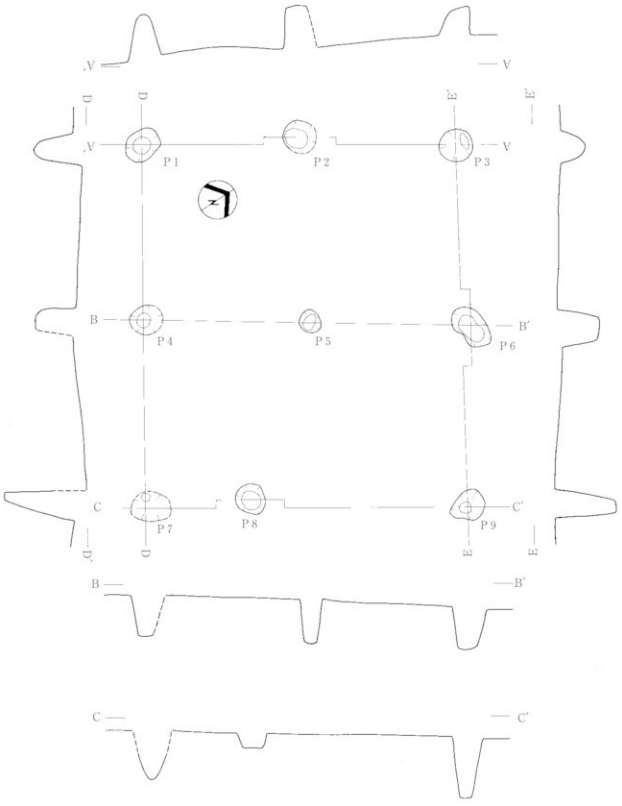
前述のとおり、本遺跡ではおよそ170基に及ぶピットを検出した。その中で特筆すべきピットを2基紹介したい。

S279は後述する「節」の字の墨書土器（21）が出土したピットである。調査区北東隅に位置し、径約40cm、検出面からの深さは84cmを測る。墨書土器は検出面から約25cmの深さで出土した。地鎮に

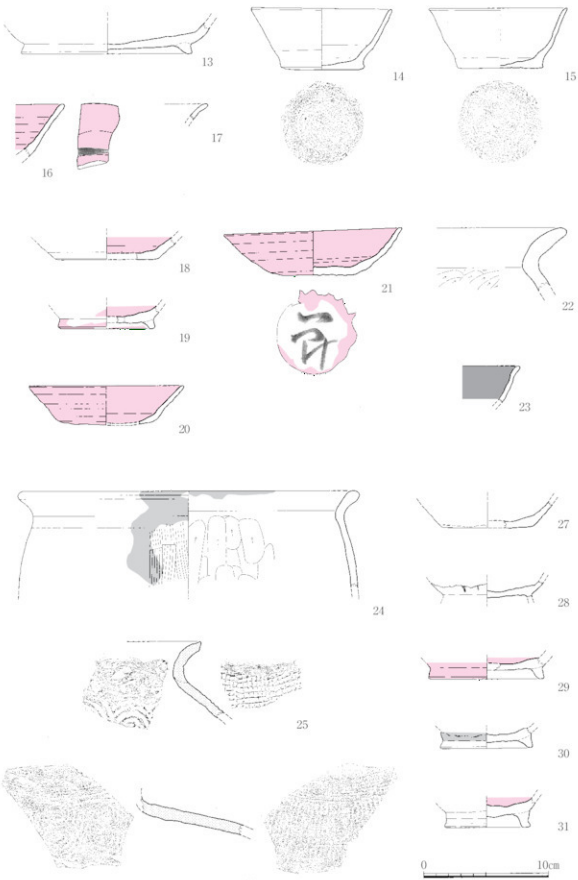


第14図　　伊坂上原遺跡土坑（S219）出土遺物実測図

第15図　　伊坂上原遺跡ピット配置図



第16図　　伊坂上原遺跡掘立柱建物（S267）実測図



第17図　　伊坂上原遺跡炉（S201・202）及びピット出土遺物実測図

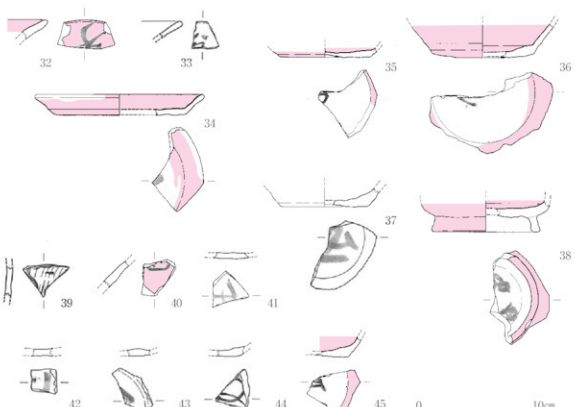
供するものなどとは考えにくく、流れ込みの遺物と思われる。

S316からは多くの遺物が出土した。他のピットと比べて明らかに特殊である。調査区北端に位置する。検出時の法量は径40～60cm、検出面からの深さは1.4mである。掘り込みが深いことから当初樹痕かと思われたが、後述する24～31を始めとする遺物が底のほうから出土したため人為的な穴と判断した。

16～19はS005から出土した土師器坏である。16は内外面に赤色顔料がよく残り、底部近くに墨書の一部が見られる。17は外面の一部に、18は外面の一部と内面に、19は内面及び外面に赤色顔料が残るが塗りむらがある。20はS209で出土した土師器坏である。内外面に赤色顔料がよく残る。21はS279で出土した土師器坏である。完形で、底部の墨書は「節」と読める。22はS293から出土した土師器甕である。1～2mmの砂粒が多く含まれる。23はS301から出土した黒色土器である。内黒であるが外面も焼成により黒色を呈する。24～31はS316で出土した土器である。24は土師器甕である。口縁端部から外面にかけてススが付着する。25・26は須恵器甕である。25は軟質の須恵器で磨滅も激しい。26は丁寧な調整で、外面の一部に自然釉がかかる。27～31は土師器坏である。27は磨滅が激しく、赤色顔料の有無は不明である。28は高台を欠き、底部外面に板状圧痕が残る。体部に墨所の一部が見られる。29は内面及び外面に赤色顔料がよく残る。30は内面に指ナデ痕がよく残る。外面にススが付着する。31は内面の赤色顔料がよく残る。高台の一部に黒斑がある。

2　包含層出土遺物について

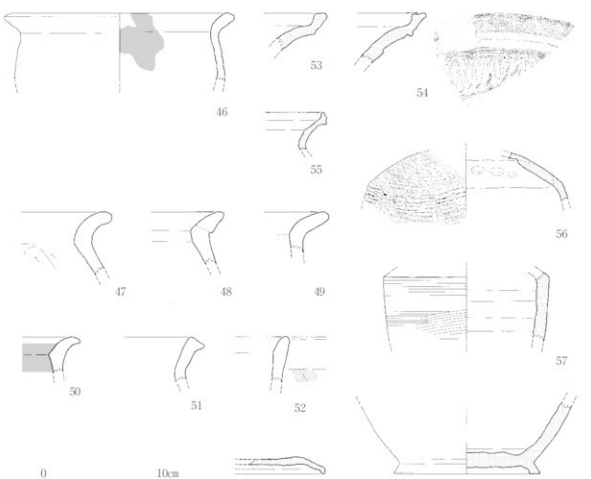
出土した遺物のほとんどは古代のものである。そのため、包含層から出土した遺物のうち古代の時期に相当するものを先に、その他の時期の出土遺物を



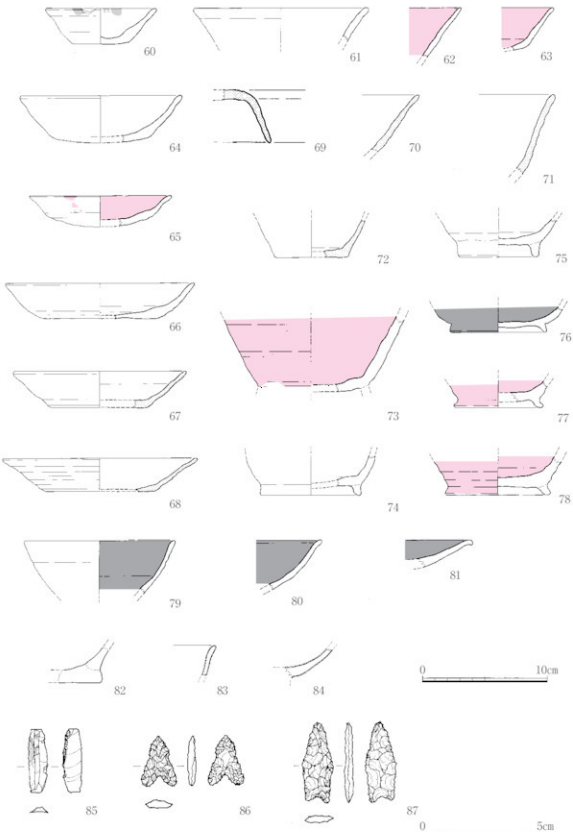
第18図　　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（1）

後にまとめて提示することとした。

32～45は墨書土器である。いずれも体部または底部に墨書の一部が認められる。読み方がわかるものはないが、墨のあとが確認できるものについて図化した。32は赤色顔料が内外によく残る。33は赤色顔料が塗布された形跡はない。34は墨の跡が薄く残る。口縁端部に塗りもれがある。35は底部中央に丸のような形が確認できる。36は字の一部と見られるものがわずかに確認できる。37は外面にわずかに赤色顔料が認められる。字は他と比べて筆の幅が広い。「恩」の一部ともとれるが不明である。38は高台内まで赤色顔料が塗布される。字であるかどうか不明である。39は甕の胴部と思われる。外面はタタキのち横方向の指ナデ痕がある。内面はケズリ調整である。40は坏の体部である。41～45は坏の底部である。41は板状圧痕が薄く残る。42・43は内面のみ赤色顔料が確認できる。44の赤色顔料の有無は不明である。45は内外面に赤色顔料が塗布されているのが確認できる。46～51は土師器の甕口縁部である。46・50は内面にススが付着する。特に50はススの付着が顕著である。52は椀口縁部と思われる。53～59は須恵器である。53～55は甕口縁部である。53は外面が赤褐色に発色し、内面の屈曲部に自然釉がかかる。54は外面に茶褐色の釉がかかり、外面にはヘラ状工具による波状文が施される。口縁端部や波状文などの特徴は荒尾郡産の須恵器に類似例がある。なお、53と54は同様の形態を有し、54の端部に擦れたような痕跡も見られることから、53・54はいずれも下向きの部位（器台等の脚端部等）の可能性もある。55の端部はつまみあげられ、２条の沈線がある。56は肩部に特殊なタタキが装飾的にめぐらされる。内面の接合付近に指押さえの跡がある。平瓶もしくは提瓶の



第19図　　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（２）



第20図　　伊坂上原遺跡包含層出土遺物実測図（３）

可能性が考えられるが、ここでは平瓶のように呈示した。57は壺の胴部である。外面は回転台を使用したカキメ、内面は同様に工具を使用して削ったなりの調整である。58は壺の底部である。外面の調整は丁寧である。59は蓋である。軟質で内面はナデ、外面はケズリ調整が施される。60は灯明皿で、口縁部に打ち欠いた跡があり、ススが付着する。61は土師器坏である。62・63は内外面ともに赤色顔料がよく残る。62の外面はススが付着する。64は磨滅が激しく赤色顔料の有無は不明である。65は内面に赤色顔料が塗布される。66は内面口縁部に黒斑がある。67・68は軟質の須恵器でともによく磨滅する。69は須恵器蓋である。全体的に赤褐色を呈し、部分的に自然釉がかかる。70～72は須恵器坏である。72の器形・調整は前述の14・15に似る。73～78は土師器坏である。73は内外面に赤色顔料がよく残り、高台がはがれたあとが観察できる。74は内外面にわずかに赤色顔料が認められる。76は、内外面ともに黒色を呈する。77・78ともに磨滅しているものの内外面の赤色顔料が認められる。79～81は内黒の黒色土器である。82～84は古代以外の時期の遺物である。82は縄文土器の底部で、胎土は土師器のものに似る。調整は丁寧である。83・84は青磁である。83には貫入があるが84には認められない。84のオリーブ色と比べると83はやや褐色を帯びる。85～87は石器である。85は黒曜石製の縦長剥片で断面は台形を呈する。86は黒曜石製の石鏃である。基部及び側縁に抉りがある。87は安山岩製の石鏃である。側縁に段がつき、五角形の形状をなす。基部に浅い抉りがある。

第２節　ワクド石遺跡

１　遺構と遺物について

本調査区で最終的に遺構と判断したのは溝２条、土坑２基、炉１基、不明遺構（硬化面）１である。このうち、時期を判別し得る遺物が伴う遺構は炉のみで、その他の遺構から遺物は出土しなかった。時期の判別が全体的に困難であるのと検出された遺構が少ないことから、遺構の種類別に述べたいと思う。

溝（S001、S002）

調査区南端に位置する。２条が並行して存在し、東端は調査区外にかかり、西端は削平される。上層も削平されているため本来の規模は不明であるが、１条の幅は40～100cm、検出面からの深さ約20cmを測る。埋土は２層に分層され、遺物は含まれない。

土坑（S003、S007）

S003は調査区北端に位置する。北側は削平される。平面形は長軸1.7m以上、短軸約80cmの長方形を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は１層で、微細な土師器片は含むが固化に耐えうる資料はない。

S007は調査区南端に位置する。前述の溝を完掘した後に検出した。平面形は長軸約1.4m、短軸約80cmの楕円形を呈する。遺構はⅢ層上面からほぼ垂直に掘り込まれ、検出面からの深さは約60cmを測る。遺物は１点も出土しなかった。

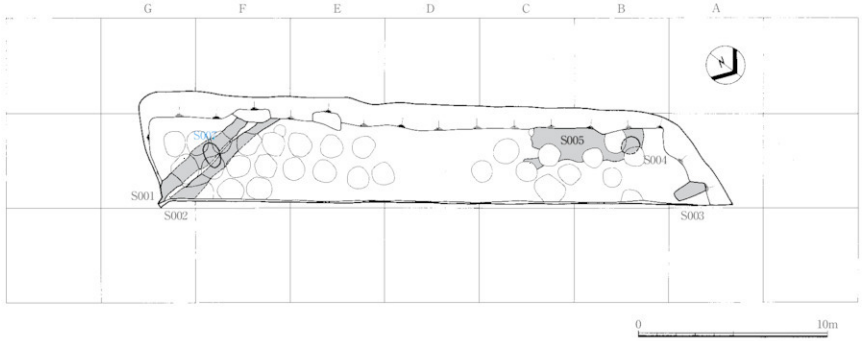
炉（S004）

調査区北端に位置する。平面形は径約90cmの円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。当初、竈ではないかと思われたが周囲に住居を想定させるような柱穴や硬化面等が見られず、炉として掲載することにした。

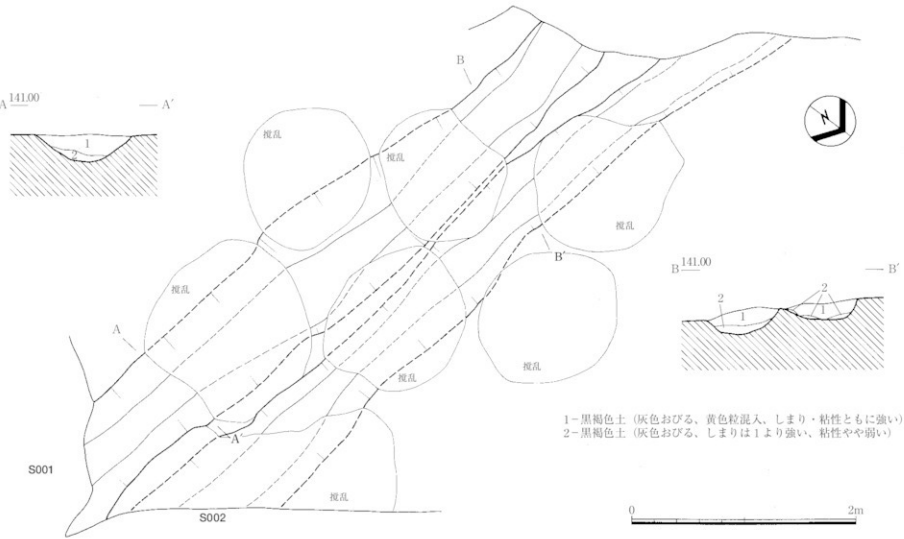
88～99はS004で出土した遺物である。88・89は鉢である。いずれも内面の口縁直下に黒斑がある。90・91は甕である。91は外面に赤色顔料が施されるが磨滅するため全体に塗布されていたかどうか不明である。92～94は土師器坏である。92・93は赤色顔料が塗布されているように見えるが磨滅のため有無は不明である。94は内外面に赤色顔料が残る。見込み及び底部に、わずかに暗文が認められる。95・96は土師器の坏または皿の底部である。95の内外面及び96の外面に赤色顔料が確認できる。96は丁寧な作りで、体部外面から底部にかけて回転ヘラ磨きが施される。97は土師器皿である。畳付を除く全面に赤色顔料が塗布され、調整はヘラ磨きである。98は須恵器蓋である。つまみを欠き、内面に自然釉がかかる。99は須恵器坏である。外面は赤褐色を呈する。高台は剥離する。

不明遺構（S005）

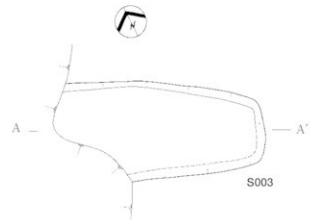
調査区北西側に位置する。全体的に掘下げを進め

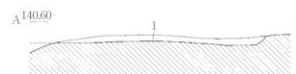


第21図　　ワクド石遺跡遺構配置図

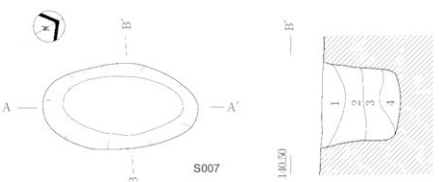


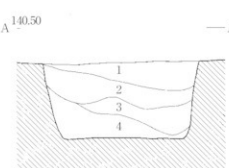
第22図　　ワクド石遺跡溝（S001・002）実測図





1－黒色土（微細な土師片混入、しまり弱く、粘性やや強い）





1－黒褐色土（ローム粒・炭粒微量混入、しまり・粘性ともに強い）
2－黒褐色土（1より黄味帯びる、しまり・粘性ともにやや強い）
3－黒色土（しまり・粘性ともにやや強い）
4－黒色土（しまりやや強く、粘性強い）

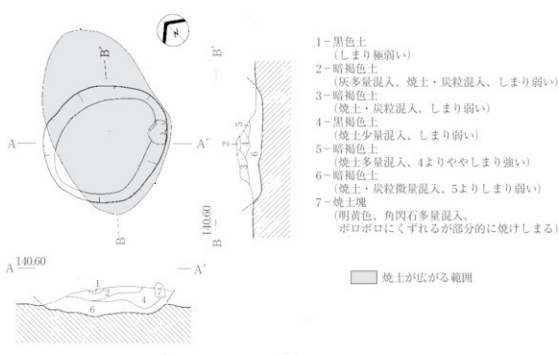
第23図　　ワクド石遺跡土坑（S003・007）実測図

ていく中で部分的に硬化する面があり、広げていくと第21図のようになった。硬化面の厚みは2～4cmである。住居の床面もしくは道路としての使用が考えられるが判定する材料に乏しく、遺構でない可能性もある。出土遺物はない。

2　包含層出土遺物について

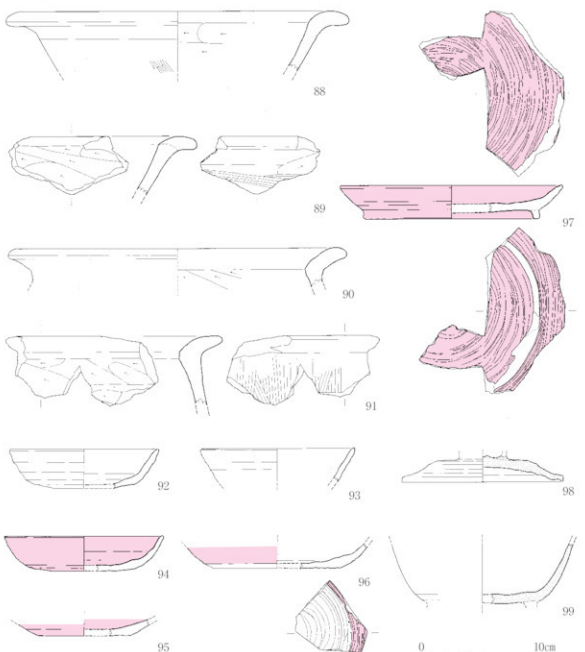
包含層から出土した遺物を大別すると縄文時代後晩期、古代の2時期である。ここでは古代の遺物を伴って検出された炉の時期である古代を遺跡の主たる時期として先にとりあげ、その後縄文土器、石器の順に述べていこうと思う。

100～102は小型の甕である。100は外面の一部に、101は外面に、102は口縁部内面にススが付着する。103～111は土師器坏である。103は内外面に赤色顔料が塗布され、底部に墨書がある。「鵜」のくずしに似るが読み方は不明である。2文字の可能性もある。104の内外面には暗文が施される。赤色顔料の有無は不明である。105は内外面に赤色顔料が塗布され、内面には暗文が施される。内面及び外面の一部に黒斑がある。107は磨滅するが内外面に赤色顔料が認められる。108も磨滅するが内面にわずかにヘラミガキ調整が認められる。109は灯明皿である。口縁部にススが付着する。110・111の赤色顔料の有無は不明である。112は内外面に赤色顔料が施され、外面に暗文がある。113～115は須恵器である。113は外面に自然釉がかかる。114は底部に板状圧痕が残る。115は丁寧な調整で、底部にヘラ書きの一部と見られるものがあるが詳細は不明である。116～133は縄文後晩期の土器である。116は波状口縁の浅鉢である。口縁部には凹点文と2条の沈線が、内外面にはヘラミガキが施される。117は磨消縄文で、外面の一部にススが付着する。118は横方向のナデの後細かなミガキ調整がなされる。外面に指頭圧痕がある。119～122は深鉢の肩部である。119・120は磨消縄文である。121は横方向のミガキのち沈線及び山形文が施される。122は横方向のミガキのち複数条の沈線が施される。123は内外面、124は口縁部及び外面に横方向のミガキが認められる。波状口縁と思われるが不明である。125は深鉢である。外面

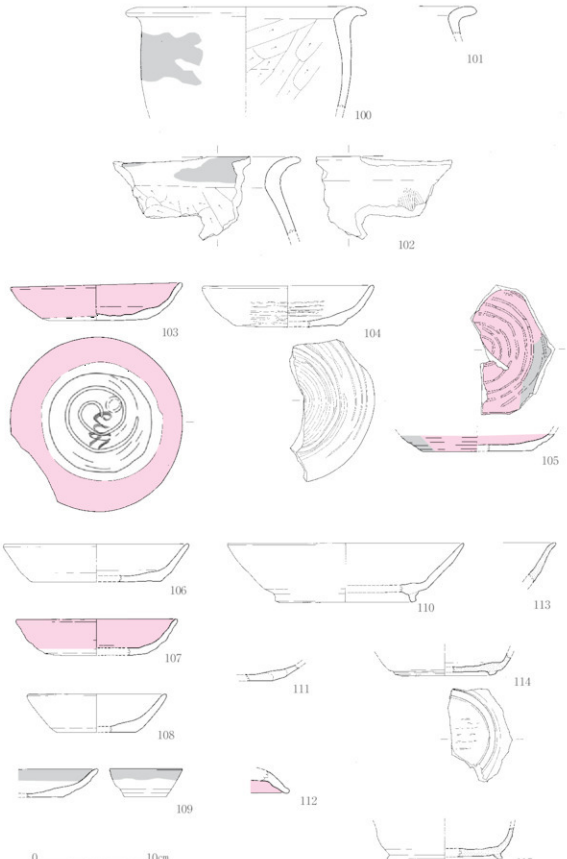


第24図　　ワクド石遺跡炉（S004）実測図

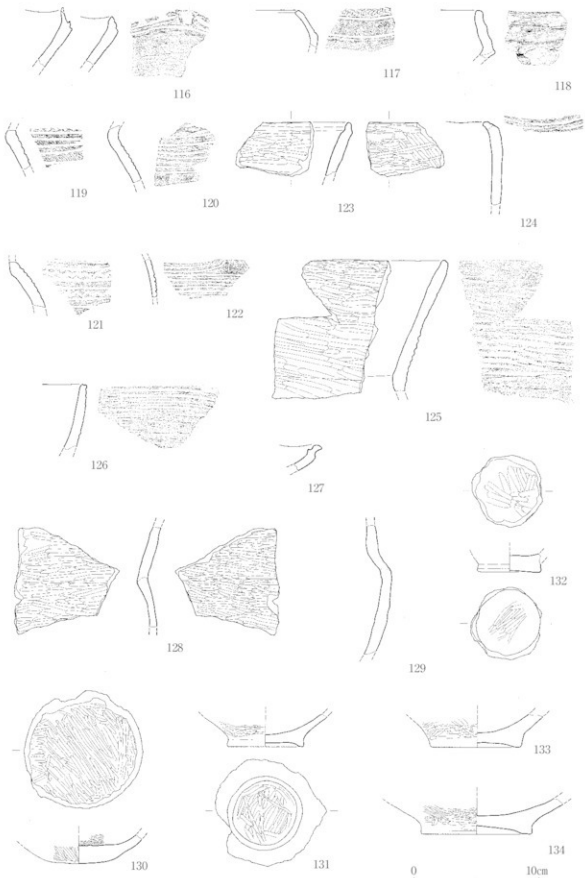
は条痕、口縁部はミガキ調整される。内面は磨滅のため調整は不明である。126も外面は条痕が残る。内面は磨滅するものの口縁部にわずかにミガキ痕が残る。127は波状口縁の浅鉢である。128・129は深鉢の胴部である。128は内外面とも横方向のミガキ痕が認められる。129は内外面の一部にススが付着する。130の器種は不明である。外面は縦方向にミガキ痕があり、内面も丁寧なミガキ痕がある。内面は黒褐色を呈するがミガキ痕の隙間を埋めるように赤色顔料が認められる。用途は不明である。131～134は深鉢の底部である。131は底部を含む外面にミガキ調整がなされる。内面は黒色を呈する。132は



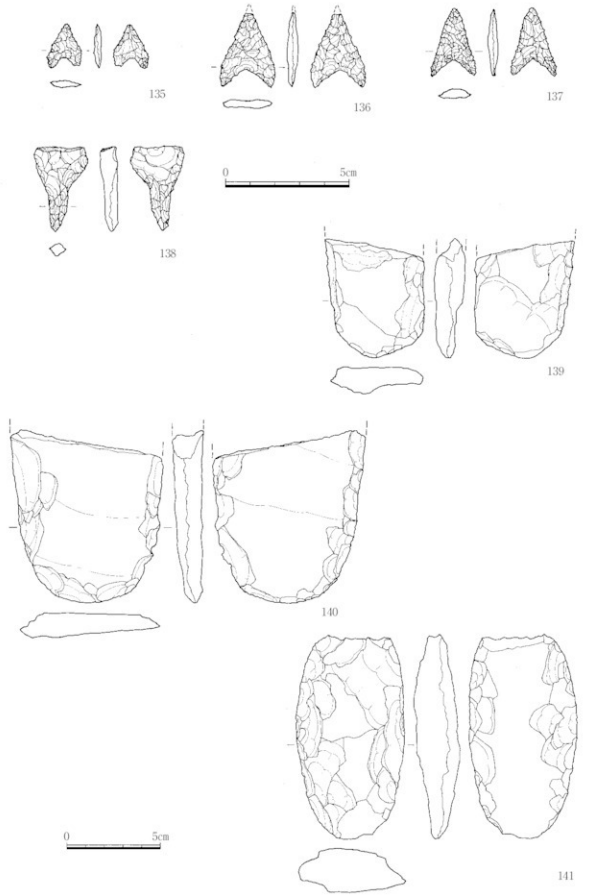
第25図　　ワクド石遺跡炉（S004）出土遺物実測図



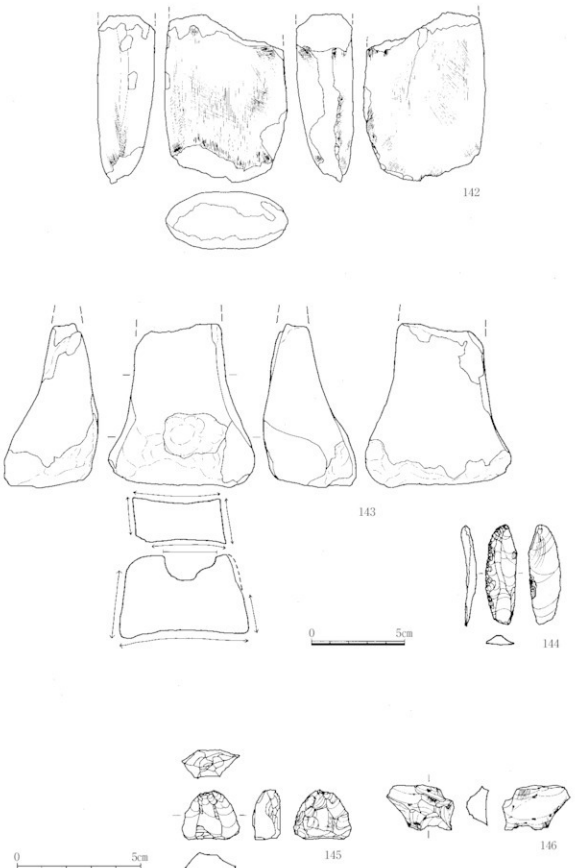
第26図　　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（1）



第27図　　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（２）

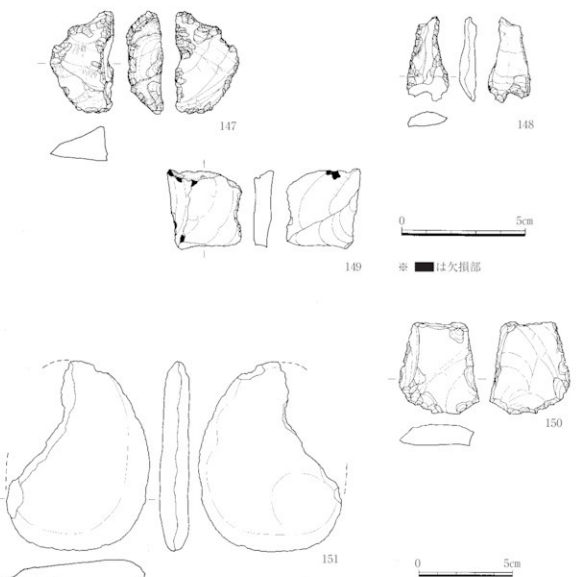


第28図　　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（３）



第29図　　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（４）

部分的にミガキ痕が残る。133は内外面の一部にススが付着する。134も内面が黒褐色を呈する。外面は横方向のミガキである。135～151は石器である。135～137は石鏃である。135・136は安山岩製、137は黒曜石製である。137は側縁が鋸歯状を呈する。138は安山岩製の石鏃である。139～141は打製石斧である。139は緑色片岩製、140は安山岩製でともに基部を欠く。141も同じく安山岩製で裏面は磨耗する。142は蛇紋岩製の磨製石斧である。基部刃部ともに欠損する。143は安山岩製の砥石である。くぼみ石を利用しており、全面に使用痕がある。144は黒曜石製の縦長剥片である。片方の側縁に刃部をつくりだす。145～150はいずれも２次加工のある剥片である。145～148は黒曜石製、149・150は安山岩製である。151は安山岩製の石器である。磨石とみられるが磨耗が激しく詳細は不明である。



第30図　　ワクド石遺跡包含層出土遺物実測図（５）

第Ⅳ章　まとめ

第１節　伊坂上原遺跡

今回の調査では溝１条、土坑４基、炉３基、掘立柱建物１棟、ピット多数を検出した。時期が不明な遺構もあるが、出土遺物から推察される遺跡の中心となる時期は古代である。以下、発掘調査によって抽出された課題を２、３述べたいと思う。

１　遺跡の時期について

本遺跡ではおよそ170基に及ぶピットを検出したが、掘立柱建物を形成する柱穴として認識したのは１棟分のみだった。しかし明らかに柱穴と認定できるものも数多くあり、この地に掘立柱建物が建設されていたことは確かである。生活の痕跡は炉跡の検出や著しくススの付着した甕の出土でも裏付けられる。S279から出土した完形の墨書土器は体部が湾曲し、ミガキの痕跡がなく比較的粗雑に作っていることから８世紀後半～９世紀前半に相当すると思われる。他の出土遺物は破片がほとんどであるため断言できないが、全体的に概ねこの時期とみて差し支えないようである。また、古代に相当する層をはいだ後に検出した土坑があるが、先に述べたとおり遺物を伴わないため時期は不明である。前回の調査では縄文時代後期、弥生時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が発掘されていた。しかし今回の調査では古代の層より下位では遺構・遺物が確認できず、上位では削平により消滅している。よって本調査区における遺跡の中心となる時期は全体として８世紀後半から９世紀前半のうちにおさまると思われる。

２　出土遺物について

出土遺物を概観して注目されるのは、一つには墨書土器が十数点出土していること、もう一つは赤色顔料を施した土師器が多いことである。墨書土器は昭和57年の調査でも１点報告されており（読みは不明）、「赤色顔料を化粧がけ」している土師器も22点報告されており割合としては高い。その中には竈付竪穴住居内から出土した坏、甕なども含まれる。通常、赤色顔料が施された土器が出土すると祭祀的な意味合いを想定しがちであるが、上記の様相をみると日常的に使用されていた可能性も否めない。とは言うものの、墨書土器の出土と合わせて考えてみるとやはり特殊な印象を受ける。伊坂上原遺跡自体が特別な性格を持っていたとも言えるかもしれない。

第２節　ワクド石遺跡

今回の調査では溝２条、土坑２基、炉１基、不明遺構（硬化面）１を検出した。このうち、遺物が伴う遺構は炉のみで、その時期は古代である。縄文後晩期の土器や、複数期にわたる石器も出土しているが、これらは包含層（客土か）からの出土である。

表土から出土した完形の墨書土器もそういう意味では本調査区の時期判定に用いるのは適切でないかもしれない。が、あえて坏の特徴から時期を推し量ると、坏自体の時期としては伊坂上原遺跡で出土した墨書土器と同様８世紀後半～９世紀前半に相当する。炉で出土した遺物及び包含層から出土した遺物もほぼこの時期におさまると思われる。

第３節　古代における伊坂上原遺跡とワクド石遺跡

10世紀の初めに記された「延喜式」は当時の交通網を復元できる資料であるが、それによると西海道（九州）では大宰府を中心として放射状に道路がしかれ、肥後には16の駅がおかれていたという。鶴島俊彦氏はそれに先立って成立していた古代道路を想定されており、伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡はともに想定ルートの沿線にある。つまり、筑紫（大宰府）から肥後を経由して豊後へ向かうルートである。ルートは現鹿本郡鹿本町から古代山城である鞠智城の南西を通過し、伊坂上原遺跡の西側及びワクド石遺跡の東側を通過し大分へ向かう。昭和57年の伊坂上原遺跡の調査ではⅦ区において幅６ｍの奈良時代

の道路遺構が検出されているし、ワクド石遺跡で検出された、溝に囲まれた集落はほぼ奈良時代におさまるとされ、調査者によると「官衙的性格をもつものとも考えられる」という。また、ワクド石遺跡の東方約３kmのところにある面ノ平遺跡では平坦部で上部幅４m前後、深さ1.2m、下底部の幅0.7～１mの道路遺構が検出されている。道路遺構の最下層からは10世紀代の土師器碗が出土している。

削平の度合いが大きい伊坂上原遺跡の調査と調査面積が極端に狭いワクド石遺跡の調査から推察できることは少ないが、今後この地における古代の様相を復元していくために今回の調査がわずかでも参考になれば幸いである。

＜参考文献＞
1　野田拓治編「熊本県文化財調査報告第27集赤星福土・水溜遺跡」熊本県教育委員会、1977
2　松本健郎編「熊本県文化財調査報告第48集生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県教育委員会、1980
3　島津義昭編「熊本県文化財調査報告第78集伊坂上原遺跡石佛遺跡」熊本県教育委員会、1986
4　古森政次編「熊本県文化財調査報告第144集ワクド石遺跡」熊本県教育委員会、1994
5　鶴島俊彦「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究第７号』、1997
6　「旭志村史」旭志村、1993
7　「菊池市史」菊池市、1982
8　下中邦彦編「熊本県の地名」平凡社、1985
9　吉田東伍「増補大日本地名辞書第四巻西国」冨書房、1901

第２表　伊坂上原遺跡土器観察表

No.	グリッド	遺構・層位	器種	法量（cm）				調整		胎土	色調		備考
				口径	底径	器高	残存率	外面	内面		外面	内面	
1	D－8,9	S219	甕	21.4	丸底	17.2	－	横ナデ・ナデ	ヘラ削り	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 6／4	にぶい橙 7.5YR 6／4	外面にスス状で付着・外面に指頭圧痕あり
2	D－8,9	S219	甕	(32.4)	－	－	4.5	縦方向のタタキのち横ナデ	横ナデ	石英・長石・角閃石・雲母・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4	橙 5 YR 7／6	内面にスス付着
3	D－8,9	S219	壺底部	(38.2)	－	－	3.7	横方向ハケメのちナデ	回転ナデ	長石	極暗赤褐 2.5YR 2／3	にぶい黄橙 10YR 7／4	輪
4	D－8,9	S219	壺底部	－	－	－	9.2	タタキ	当て具痕（同心円）	長石・茶褐色粒	灰 7.5Y 5／1	オリーブ黒 2.5Y 3／1	
5	D－8,9	S219 1層	坏	(10.6)	(6.2)	3.2	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・赤色粒	明赤褐 2.5YR 5／8	明赤褐 2.5YR 5／8	墨書土器（部分的に黒跡が残るが、全体的には消滅・赤色顔料（内外面）
6	D－8,9	S219	坏	－	(6.0)	2.35	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	密	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	赤色顔料（内面）
7	D－8,9	S219	坏	(11.6)	－	－	2.8	回転ナデ	回転ナデ	長石・金雲母・赤褐色粒	橙 2.5YR 6／6	橙 2.5YR 6／6	赤色顔料（内面）
8	D－8,9	S219	耳皿	7.0	4.5	3.4	－	ナデ	ナデ	密	橙 2.5YR 6／6	橙 2.5YR 6／6	赤色顔料？
9	D－8,9	S219 1層	坏	－	(11.0)	(10.4)	3.0	横ナデ・ヘラ切り	横ナデ・ナデ	石英・長石・角閃石・雲母・赤褐色粒	にぶい橙 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	
10	D－8,9	S219	坏	－	－	－	0.7	回転ナデ・ナデ	ヘラミガキ	石英・長石・角閃石・雲母	にぶい橙 7.5YR 7／4	黒 7.5YR1.7／1	内黒
11	D－8,9	S219	壺底部	(12.3)	－	－	3.8	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・茶褐色粒	黄灰 2.5Y 5／1	黄灰 2.5Y 5／1	
12	D－8	S219	壺底部	－	7.2	－	1.0	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	石英・長石・赤褐色粒	灰 5 Y 6／1	灰 5 Y 6／1	
13	E－10	S301	坏	－	(3.4	－	2.1	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	赤褐 2.5YR 4／6	赤褐 2.5YR 4／6	赤色顔料？磨滅が激しい
14	D－11	S202 2層	坏	11.1	6.7	5.05	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・赤色粒・黒色粒	浅黄橙 7.5YR 8／4	浅黄橙 7.5YR 8／4	板状圧痕あり
15	D－11	S202 2層	坏	11.0	6.8	4.9	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・金雲母・赤色粒・黒色粒	浅黄橙 10YR 8／4	橙 5 YR 7／6	板状圧痕あり
16	B－2	S005	坏	－	－	－	4.2	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	赤褐 2.5YR 4／8	赤褐 2.5YR 4／8	墨書土器・赤色顔料（内外面）
17	B－1,2	S006 1層	坏	－	－	－	1.3	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／8	にぶい橙 7.5YR 7／4	赤色顔料（外面）
18	B－1,2	S006 1層	坏	－	(8.3)	－	1.35	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／8	明赤褐 2.5YR 5／6	赤色顔料（内外面）
19	B－1,2	S006 1層	坏	－	(7.6)	－	1.35	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	長石・角閃石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4 明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	赤色顔料（内外面）
20	D－9	S209 2層	坏	(12.4)	(7.7)	3.15	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒 黒色粒	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／8	赤色顔料（内外面）
21	B－9	S279	坏	14.1	5.65	3.8	－	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	密	橙 2.5YR 6／6	橙 2.5YR 6／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
22	E－10	S293	甕	－	－	－	4.7	横ナデ	横ナデ・多方向のヘラ削り	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7／3	にぶい黄橙 10YR 7／3	
23	C－11	S301	坏	－	－	－	2.9	回転ナデ	回転ナデのち横方向のヘラミガキ	石英・長石・角閃石・雲母	にぶい黄橙 10YR 7／4 黒褐 10YR 3／1	黒 10YR1.7／1	内黒
24	D－11	S316	甕	(26.7)	－	－	7.8	横ナデ・縦方向のハケメ	横ナデのち縦方向のヘラ削り	石英・長石・角閃石・雲母	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 7／4	スス付着
25	D－11	S316	壺底部	－	－	－	5.8	タタキのち横ナデ	横ナデ・当て具痕（同心円）	石英・角閃石・雲母	浅橙 5 YR 8／4	灰白 10YR 8／1	軟質のため磨滅が激しい
26	D－11	S316	壺底部	－	－	－	2.4	タタキのち横ナデ	横ナデ・当て具痕（同心円）	石英・長石・赤褐色粒	黄灰 2.5Y 6／1	黄灰 2.5Y 6／1	外面に自然釉
27	D－11	S316	坏	－	(7.6)	－	1.8	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒	橙 2.5YR 6／6	橙 2.5YR 6／6	赤色顔料？
28	D－11	S316	坏	－	－	－	1.1	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	石英・長石・金雲母	にぶい橙 7.5YR 7／4 明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	外面に墨書あり（字体は不明）・高台欠損・板状圧痕あり
29	D－11	S316	坏	－	(9.3)	－	1.2	回転ナデ・ヘラ切り	ナデ	石英・長石・雲母・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7／3 明赤褐 2.5YR 5／8	赤褐 2.5YR 4／8	赤色顔料（内外面）

No.	グリッド	遺構・堆位	器種	法量（cm）				調整		胎土	色調		備考
				口径	底径	器高	残存高	外面	内面		外面	内面	
30	D－11	S.316	坏	－	7.2	－	1.3	ナデ・ヘラ切りのちナデ	ナデ・多方向の指ナデ	長石・赤褐色粒	橙 2.5YR 6／6	にぶい橙 7.5YR 7／4	底径（短軸7.0/ 長軸7.4）・外面にスス付着
31	D－11	S.316	坏	－	6.8	－	2.0	回転ナデ・ナデ・ヘラ切りのちナデ	回転ナデ・ナデ	石英・長石・雲母・赤褐色粒	橙 2.5YR 6／8 にぶい橙 7.5YR 7／4	明赤褐 2.5YR 5／6	赤色顔料（内面）・高台一部欠損のため、底幅は推定値（短軸6.4/ 長軸6.9）・一部黒斑あり
32	D－5	Ⅳ層	坏？	－	－	－	1.6	回転ナデ	回転ナデ	長石・角閃石・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
33	D－11	Ⅱ層	坏？	－	－	－	1.3	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色粒	橙 5 YR 6／6	橙 5 YR 6／6	墨書土器
34	A－5	Ⅱ層	皿	(13.2)	(10.6)	1.7	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6 にぶい橙 7.5YR 7／4	墨書土器・赤色顔料（内外面）
35	C－4	Ⅳ層	皿？	－	(7.4)	－	0.5	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	金雲母	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
36	D－11	Ⅱ層	坏	－	(8.2)	－	2.5	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	赤 10R 5／8	橙 2.5YR 6／8	墨書土器・赤色顔料（内外面）
37	B－10	撹乱	坏	－	(6.9)	－	1.2	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	灰白 2.5YR 6／2	灰白 10YR 8／2	墨書土器・赤色顔料？
38	B－2	トレンチ	坏	－	(8.4)	－	2.2	回転ナデ・横ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	長石・金雲母・赤褐色粒 黒色粒	橙 2.5YR 6／8	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
39	C－10	Ⅱ層	甕	－	－	－	2.4	ケタキのち横ナデ	横ナデのちヘラ削り	密	にぶい橙 7.5YR 6／4	にぶい橙 7.5YR 6／4	墨書土器
40	C－11	Ⅱ層	坏	－	－	－	1.8	回転ナデ	回転ナデ	密	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
41	B－10	一括	坏	－	－	－	0.5	ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	密	にぶい橙 5 YR 7／4	橙 5 YR 6／6	墨書土器・板状圧痕あり
42	D－11	Ⅱ層	坏	－	－	－	0.6	ナデ	回転ナデ	密	にぶい橙 7.5YR 7／4	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内面）
43	C－11	Ⅱ層	坏	－	－	－	0.6	ナデ	回転ナデ	密	にぶい黄橙 10YR 7／3	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内面）
44	一括	表土	坏	－	－	－	0.8	ナデ	回転ナデ	密	にぶい橙 5 YR 6／4	橙 5 YR 6／6	墨書土器・赤色顔料？
45	D－11	Ⅱ層	坏	－	(7.2)	－	1.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	密	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	墨書土器・赤色顔料（内外面）
46	C－10	Ⅱ層	甕	(17.0)	－	－	5.5	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒 黒色粒	にぶい黄橙 10YR 7／4	橙 5 YR 6／6	内面の一部にスス付着
47	A－8	Ⅱ層	甕	(21.2)	－	－	4.6	横ナデ・ナデ	横ナデ・斜め方向のヘラ削り	石英・角閃石・金雲母 赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／3	にぶい橙 2.5Y 6／3	
48	B－8	Ⅱ層	甕	－	－	－	4.2	横ナデ・縦方向のハケメのちナデ	横ナデ・横方向のヘラ削り	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 7／4	
49	B－8	Ⅱ層	甕	－	－	－	3.3	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒 黒色粒	浅黄橙 10YR 8／4	浅黄橙 10YR 8／4	
50	B－2	Ⅱ層	甕	－	－	－	2.8	ナデ	横ナデ・横方向のヘラ削り	石英・長石・角閃石	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 7／4	スス付着（内面）
51	C－11 D－11	Ⅱ層	甕	(22.4)	－	－	3.4	回転ナデ	回転ナデ	石英・角閃石・金雲母 赤褐色粒・黒色粒	にぶい黄橙 10YR 7／3	にぶい橙 7.5YR 7／3	
52	B－8	Ⅱ層	甕	(17.8)	－	－	3.7	横ナデ・斜め方向ハケメ	横ナデ・横方向のヘラ削りのちナデ	石英・角閃石・金雲母 赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 6／4	
53	A－1,2	撹乱	須恵器 蓋	－	－	－	3.0	回転ナデ	回転ナデ	長石・黒色粒	暗赤褐 2.5YR 3／4	黄灰 2.5Y 5／1	外面は赤変・内面は一部自然釉
54	C－11	Ⅱ層	須恵器 蓋	(34.8)	－	－	4.0	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石	赤黒 2.5YR 2／1	灰黄褐 10YR 5／2	外面施釉・ヘラ状工具による波状文
55	A－7	Ⅱ層	須恵器 蓋	(13.4)	－	－	3.0	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・赤褐色粒	灰 7.5Y 5／1	灰 7.5Y 5／1	
56	B－8	Ⅱ層	須恵器 甲類？	－	－	－	3.7	ケタキのち横ナデ	横ナデ	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	灰黄褐 10YR 5／2	灰 7.5Y 5／1	指頭圧痕（内面）・装飾のなタキが施される
57	D－11	Ⅱ層	須恵器 壺	(13.3)	－	－	5.6	回転ナデのちカキメのちナデ	ヘラ削り	長石・黒色粒	灰 7.5Y 5／1	灰 7.5Y 6／1	
58	A－8	Ⅱ層	須恵器 壺	－	(10.8)	－	5.5	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	長石・赤褐色粒	灰 10Y 4／1	灰 10Y 5／1	
59	C－10	Ⅱ層	須恵器 壺	(14.0)	(9.8)	1.4	－	ヘラ削り	回転ナデ	石英・長石灰	灰白 10YR 7／1	灰白 10YR 8／1	
60	C－12	Ⅱ層	皿	8.8	4.7	2.9	－	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	回転ナデ・ナデ	密	にぶい橙 7.5YR 7／4	1にぶい橙 7.5YR 7／4	一部スス付着

No.	グリッド	遺構・堆位	器種	法量（cm）				調整		胎土	色調		備考
				口径	底径	器高	残存高	外面	内面		外面	内面	
61	D－11	Ⅱ層	坏	（13.6）	－	－	2.8	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	
62	C－10	Ⅱ層	坏	－	－	－	4.0	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母 赤褐色粒・黒色粒	赤褐 5 YR 4／6	赤褐 5 YR 4／6	赤色顔料（内外面）・外面に一部スス付着
63	C－9	Ⅱ層	坏	－	－	－	3.4	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	赤色顔料（内外面）
64	B－3	S.069	坏	（13.0）	（7.9）	3.7	－	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母 赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	磨滅が激しい
65	A－5	Ⅱ層	坏	（11.2）	（7.8）	2.4	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	赤褐 2.5YR 4／8	明赤褐 2.5YR 5／8	赤色顔料（内面）
66	A－5	Ⅱ層	坏	（15.2）	（9.2）	2.8	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 7／4	黒斑あり（内面）
67	A－8	Ⅱ層	須恵器坏	（13.7）	（7.6）	2.9	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石	灰 5 Y 5／1	灰 5 Y 5／1	磨滅が激しい
68	C－10	Ⅱ層	須恵器坏	（15.6）	（8.9）	2.7	－	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・雲母	灰白 2.5Y 7／1	灰白 2.5Y 7／1	磨滅が激しい
69	A－7 B－8	Ⅱ層	須恵器蓋	（16.0）	－	－	4.2	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石	灰 5 Y 6／1	にぶい赤褐 5 YR 5／3 灰黄褐 10YR 5／2	自然釉（口縁付近）
70	D－11	Ⅱ層	須恵器坏	－	－	－	4.55	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石	黄灰 2.5Y 6／1	黄灰 2.5Y 6／1	
71	C－11 D－11	Ⅱ層	須恵器坏	（14.0）	－	－	6.4	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石	灰 5 Y 6／1	灰黄 2.5Y 6／2	
72	C－11	Ⅱ層	須恵器坏	－	（5.6）	－	2.9	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・雲母	褐灰 10YR 5／1	褐灰 10YR 5／1	
73	C－11 D－11	Ⅱ層	坏	－	（8.9）	－	5.8	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	密	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	高台欠損・赤色顔料（内外面）
74	C－10	Ⅱ層	坏	－	（8.05）	－	3.2	回転ナデ・横ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5／6	明赤褐 2.5YR 5／6	全体的に磨滅が激しい
75	D－11	Ⅱ層	坏	－	（6.8）	－	2.95	回転ナデ・ヘラ切りのちナデ	回転ナデ・指ナデ	石英・長石・角閃石・雲母	赤 10R 5／6 にぶい橙 7.5YR 7／4	赤 10R 5／6	
76	C－11	Ⅱ層	坏	－	（7.7）	－	1.8	回転ナデ・ヘラ切りのちナデ	ナデ	石英・長石・角閃石	褐灰 10YR 6／1 褐灰 10YR 4／1	黒褐 10YR 3／1	内黒
77	C－11	Ⅱ層	坏	－	（6.5）	－	1.7	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／3 赤褐 2.5YR 4／8	赤褐 2.5YR 4／8	赤色顔料（内外面）
78	A－7	Ⅱ層	坏	－	（8.2）	－	2.7	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒 黒色粒	赤 10R 5／6 にぶい橙 7.5YR 7／4	橙 2.5YR 6／8	赤色顔料（内外面）
79	C－11	Ⅱ層	坏	（12.0）	－	－	4.3	回転ナデ	ヘラミガキ	石英・長石・角閃石・金雲母 赤褐色粒・黒色粒	黒 5 YR 5／6	黒 10YR 2／1	内黒
80	D－11	Ⅱ層	坏	－	－	－	4.0	回転ナデのちヘラミガキ	ヘラミガキ	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	黒 10YR 2／1 浅黄橙 10YR 8／3	黒 10YR 2／1	内黒
81	A－5	Ⅱ層	坏	－	－	－	2.2	回転ナデ	回転ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 6／4	黒 10YR 2／1	内黒
82	A－9	Ⅱ層	深鉢？	－	（7.0）	－	2.5	ナデ	ナデ	石英・長石・角閃石	にぶい黄橙 10YR 7／4	にぶい黄橙 10YR 7／4	
83	A－7	Ⅱ層	碗	－	－	－	2.4	回転ナデ	回転ナデ	密	灰オリーブ 7.5Y 5／2	灰オリーブ 7.5Y 5／2	青磁・内外面に貫入あり
84	一括	表土	碗	－	－	－	2.4	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	密	オリーブ灰 5.GY 6／1	オリーブ灰 5.GY 6／1	青磁

（註）「遺構・堆位」について…包含層から出土したものについてはローマ数字で、遺構から出土したものについては遺構名と算用数字で表記した。ただし遺構から出土したものを一括して取り上げたものは遺構名のみ表記した。
「法量」について…（　）内の数値は反転復元後および推定の数値である。

第3表　ワクド石遺跡土器観察表

No.	グリッド	遺構・層位	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	残存率	調整 外面	内面	胎土	色調 外面	内面	備考
88	B	S.004	鉢	(25.4)	–	–	4.8	横ナデ・斜め方向のハケメのちナデ	横ナデ・横方向のヘラ削り	石英・角閃石・金雲母	明赤褐 5YR 5/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	黒斑あり
89	B	S.004	鉢	–	–	–	4.7	横ナデ・ナデのち一部横方向のハケメ	横ナデ・斜め方向のヘラ削り	石英・金雲母・角閃石	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	黒斑あり
90	B	S.004 3層	壺	(26.0)	–	–	2.7	横ナデ	横ナデ・斜め方向のヘラ削り	石英・角閃石・長石	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	
91	B	S.004 2層 撹乱	壺	–	–	–	5.5	横ナデ・縦方向のハケメ	横ナデ・横方向のヘラ削り	石英・角閃石・金雲母	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6 にぶい橙 7.5YR 6/4	外面に赤色顔料？
92	B	S.004	坏	(12.0)	(8.15)	3.1	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	角閃石・金雲母・石英	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	赤色顔料？
93	B	S.004	坏	(12.3)	–	–	2.7	回転ナデ	回転ナデ	角閃石・金雲母・石英	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	赤色顔料？
94	B	S.004 3層	坏	(12.7)	(9.0)	2.8	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	金雲母・石英・角閃石・長石	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	赤色顔料（内外面）・底部外面に暗文
95	B	S.004	坏？	–	(7.4)	–	0.9	回転ナデ・ヘラ切り	ミガキ・ナデ	石英・角閃石・金雲母	明赤褐 5YR 5/6	橙 5YR 6/6	赤色顔料（内外面）
96	B	S.004	坏？	–	(10.2)	–	1.7	ヘラ切りのちヘラミガキ	回転ナデ	角閃石・金雲母	橙 2.5YR 6/8	橙 2.5YR 6/8	赤色顔料（外面）
97	B	S.004	坏	(17.7)	(14.4)	2.7	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	角閃石・金雲母	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	赤色顔料（内外面）
98	B	S.004	須恵器 蓋	(13.0)	–	–	2.1	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデのち多方向ナデ	赤色粒・黒色粒	灰黄褐 10YR 5/2	灰黄褐 10YR 6/2	内面に自然釉付着
99		S.004	須恵器 坏	–	(9.7)	–	4.8	回転ナデ・ヘラ切り・ナデ	回転ナデ	赤色粒・角閃石	灰白 2.5Y 7/1	灰黄褐 10YR 5/2	高台欠損
100	B	撹乱	壺	(17.6)	–	–	8.1	横ナデ・ナデ	横ナデ・斜め方向のヘラ削り	石英・金雲母・角閃石	明赤褐 5YR 5/6	明褐 7.5YR 5/6	外面の一部にスス付着
101	B	撹乱	壺	–	–	–	2.2	横ナデ	横ナデ・斜め方向のヘラ削り	石英・金雲母・角閃石	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい赤褐 5YR 5/3	外面にスス付着
102	B	Ⅱ層	壺	–	–	–	6.0	横ナデ・部分的にハケメ	横ナデ・不定方向の ヘラ削り	石英・角閃石	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	口縁部内面にスス付着
103	D	Ⅱ～Ⅲ層	坏	13.7	8.1	3.0	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	赤褐色粒・石英・金雲母・長石 角閃石	赤 10R 5/8	赤 10R 5/8	墨書土器・底部外面に指頭圧痕・赤色顔料（内外面）
104	A・B	Ⅱ層	坏	(13.7)	(8.8)	3.3	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	角閃石・赤褐色粒	橙 2.5YR 6/8	橙 2.5YR 6/8	内面と外縁に暗文あり
105	B	撹乱	坏	–	(8.8)	–	1.35	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・黒色粒・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5/6	橙 2.5YR 6/6	内外面の一部に黒斑あり・赤色顔料（内外面）・内面に暗文あり
106	B	撹乱	坏	(14.9)	(10.4)	3.0	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・黒色粒・赤褐色粒	明赤褐 5YR 5/6	橙 5YR 6/6	
107	B	Ⅲ層	坏	(12.9)	(8.4)	2.9	–	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	雲母・石英・角閃石	橙 2.5YR 6/8	明赤褐 2.5YR 5/6	赤色顔料（内外面）
108	B	撹乱	坏	(11.0)	(6.4)	3.05	–	回転ナデ・ヘラ切り	ナデのち回転ヘラミガキ	石英・金雲母・角閃石	にぶい橙 7.5YR 5/3	にぶい橙 7.5YR 6/4	
109	D	Ⅲ層	皿	–	–	–	2.25	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	赤褐色粒・石英・金雲母	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部にスス付着
110	B	Ⅱ層 撹乱	坏	(18.9)	(13.0)	4.7	–	回転ナデ・横ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	石英・金雲母	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	赤色顔料？
111		S.006	坏	–	–	–	1.0	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	角閃石・石英	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	赤色顔料？
112	B	Ⅲ層	蓋	–	–	–	1.75	回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	金雲母・石英・赤褐色粒	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	赤色顔料（内外面）・外面に暗文あり
113	B	撹乱	須恵器 坏	–	–	–	3.2	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒	褐灰 10YR 5/1	黄灰 2.5Y 6/1	外面に自然釉付着
114		Ⅱ層	須恵器 坏	–	(9.0)	–	1.45	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	白色粒・石英・黒色粒	暗紫灰 5P 4/1	紫灰 5P 6/1	底部に板状圧痕あり
115	B	Ⅲ層	須恵器 坏	–	(9.1)	–	2.6	回転ナデ・横ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	黒色粒	褐灰黄 2.5Y 5/2	灰黄褐 10YR 6/2	
116	D	Ⅱ～Ⅲ層	浅鉢	–	–	–	4.3	口縁部に2条の沈線・横ナデのち横方向のヘラミガキ	横ナデのち横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・金雲母	灰褐 7.5YR 5/2	灰褐 7.5YR 4/2	連状口縁
117		S.006	深鉢？	–	–	–	2.9	断面縄文のち2条の沈線・横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	雲母・角閃石・石英	にぶい橙 7.5YR 7/4	浅黄橙 7.5YR 8/3	外面の一部にスス付着

No.	グリッド	遺構・層位	器種	法量（cm）				調整		胎土	色調		備考
				口径	底径	器高	残存高	外面	内面		外面	内面	
118	D	Ⅱ層	深鉢	－	－	－	3.8	横ナデのちヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙 10YR 7／4	にぶい黄橙 10YR 7／3	外面に黒斑あり
119	B	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	－	－	－	2.8	磨消縄文のち斜み目と横方向の5条の沈線	横方向のヘラミガキ	角閃石・金雲母・石英 赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7／4	にぶい黄橙 10YR 7／4	磨消縄文
120	B	Ⅲ層	深鉢	－	－	－	4.0	横方向のヘラミガキのち7条の沈線	横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・長石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 7／4	にぶい橙 7.5YR 7／4	磨消縄文
121	A	Ⅲ層	深鉢	－	－	－	3.6	横方向のミガキのち6条の沈線（沈線と沈線の間に山形文が2条）	横方向のナデ	角閃石・石英・長石・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR 6／4	にぶい橙 7.5YR 6／4	
122	E	Ⅲ層	深鉢	－	－	－	2.95	横方向のヘラミガキのち沈線	横方向のヘラミガキ	石英・雲母	黒灰 2.5Y 4／1	黒灰 2.5Y 5／1	
123		表土	深鉢？	－	－	－	4.0	横または斜め方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・長石	にぶい褐 7.5YR 6／3	にぶい橙 7.5YR 6／4	
124		表土	深鉢	－	－	－	6.6	ヘラミガキのちナデ・口唇部に1条の沈線	横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7／4	灰黄褐 10YR 6／2	
125	B	Ⅲ層	深鉢	－	－	－	10.5	横方向の条痕・条痕のち横ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	角閃石・石英・長石・金雲母 赤褐色粒	明褐灰 7.5YR 7／2	明褐灰 7.5YR 7／2	
126	B	Ⅲ層	深鉢？	－	－	－	5.0	横方向の条痕	横方向のナデ・かすかにミガキ痕が残る	角閃石・石英・長石・金雲母 赤褐色粒	褐灰 10YR 5／1	にぶい黄橙 10YR 7／4	
127	E	Ⅲ層	浅鉢	－	－	－	2.05	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	石英・角閃石・金雲母・長石	黒褐 10YR 3／1	灰黄褐 10YR 4／2	波状口縁
128	B	Ⅳ層	深鉢	－	－	－	7.8	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	角閃石・石英・長石・金雲母	褐灰 2.5Y 5／2	灰黄褐 10YR 6／2	
129	B	Ⅲ層	深鉢	－	－	－	10.0	横ナデ・横方向の条痕のち横方向のナデ	横ナデ・横方向の条痕のち横方向のナデ	角閃石・石英・長石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR 6／3	にぶい黄橙 10YR 7／3	内外面の一部にスス付着
130	D	Ⅱ～Ⅲ層	不明	－	4.6	－	1.9	縦方向のヘラミガキ	多方向のヘラミガキ	角閃石・石英・長石	にぶい橙 7.5YR 6／4	黒褐 7.5YR 3／1	内外面にスス付着・赤色顔料（内面に一部残存）
131		Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	－	6.0	－	2.4	多方向のヘラミガキ	ヘラミガキ	角閃石・石英・雲母	明赤褐 5YR 5／6	黒褐 2.5Y 3／1	内面全体が黒変している
132			S-006	－	5.0	－	1.2	横ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	石英・角閃石・雲母	にぶい黄橙 10YR 7／4	明黄褐 10YR 7／6	
133	B	Ⅲ層	深鉢	－	7.0	－	2.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	角閃石・雲母・石英・赤褐色粒	橙 2.5YR 6／8	浅黄橙 10YR 8／4	内外面の一部にスス付着
134	E	攪乱	深鉢	－	(8.7)	－	2.35	横方向のヘラミガキ・丁寧なナデ	ナデ	角閃石・石英	橙 5YR 6／6	浅黄 2.5Y 7／4	内面が黒変している

（註）「法量」について…（ ）内の数値は反転復元および推定の数値である。

第4表　伊坂上原遺跡石器観察表

No.	グリッド	層位	器種	石材	法量（cm）			重量（g）	備考
					長さ	幅	厚さ		
85	D－11	Ⅲ層	縦長剥片	黒耀石	2.60	0.80	0.20	0.40	
86	C－11	Ⅱ層	石鏃	黒耀石	2.00	1.40	0.35	0.62	
87	D－11	Ⅲ層	石鏃	安山岩	3.20	1.25	0.30	1.24	

第5表　ワクド石遺跡石器観察表

No.	グリッド	層位	器種	石材	法量（cm）			重量（g）	備考
					長さ	幅	厚さ		
135		表土	石鏃	安山岩	1.70	1.90	0.30	0.50	
136	D	Ⅲ層	石鏃	安山岩	3.00	2.20	0.45	1.80	
137	G	Ⅱ～Ⅲ層	石鏃	黒耀石	2.70	1.80	0.40	0.90	
138	B	Ⅱ層	石鏃	安山岩	3.40	2.15	0.70	3.60	
139	C	Ⅲ層	打製石斧	緑色片岩	6.30	5.30	1.40	63.60	
140	F	Ⅲ層	打製石斧	安山岩	9.20	8.10	1.50	143.40	
141	C	Ⅱ～Ⅲ層	打製石斧	安山岩	10.80	5.20	2.50	176.70	
142	F	攪乱	磨製石斧	蛇紋岩	8.90	6.40	3.00	280.80	
143	D	表採	凹石	安山岩	8.70	7.70	4.20	313.90	全体に使用痕有り
144		Ⅲ～Ⅳ層	縦長剥片	黒耀石	5.25	1.60	0.50	3.70	
145	C	Ⅱ～Ⅲ層	二次加工のある剥片	黒耀石	2.00	2.30	1.10	5.10	楔形石か？
146	A	表採	二次加工のある剥片	黒耀石	1.80	2.70	0.90	3.00	
147		表土	二次加工のある剥片	黒耀石	4.10	2.50	1.50	12.70	
148	C	攪乱	二次加工のある剥片	黒耀石	3.40	1.70	0.55	2.60	
149	D	Ⅱ層	二次加工のある剥片	安山岩	3.30	3.00	0.80	9.20	
150		表採	二次加工のある剥片	安山岩	4.90	4.20	1.20	32.50	
151	B	Ⅱ層	磨石？	安山岩	10.00	7.50	1.40	112.10	

図　　版

図版１　伊坂上原遺跡

１　南側調査区全景（北西から）

２　S322平断面（南から）

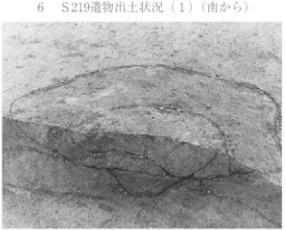
３　S295完掘状況（東から）

４　S001完掘状況（北から）

５　S006平断面（東から）

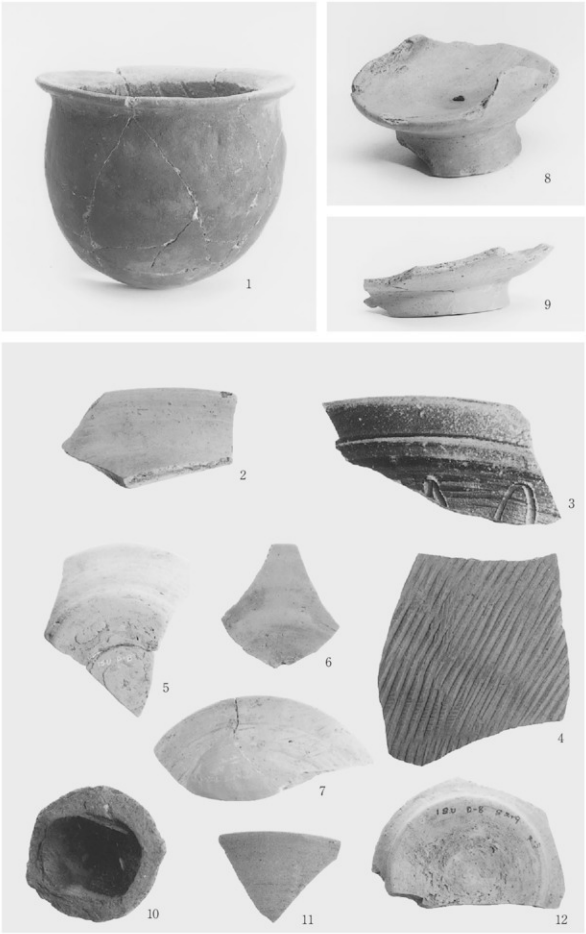
６　S219遺物出土状況（１）（南から）

７　S219遺物出土状況（２）（南から）

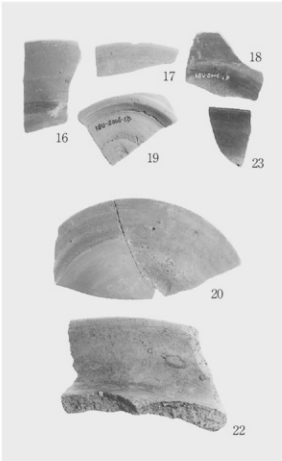


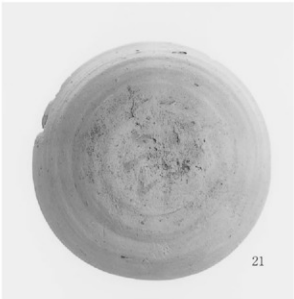
８　S202年断面（東から）

図版２　伊坂上原遺跡出土遺物（１）

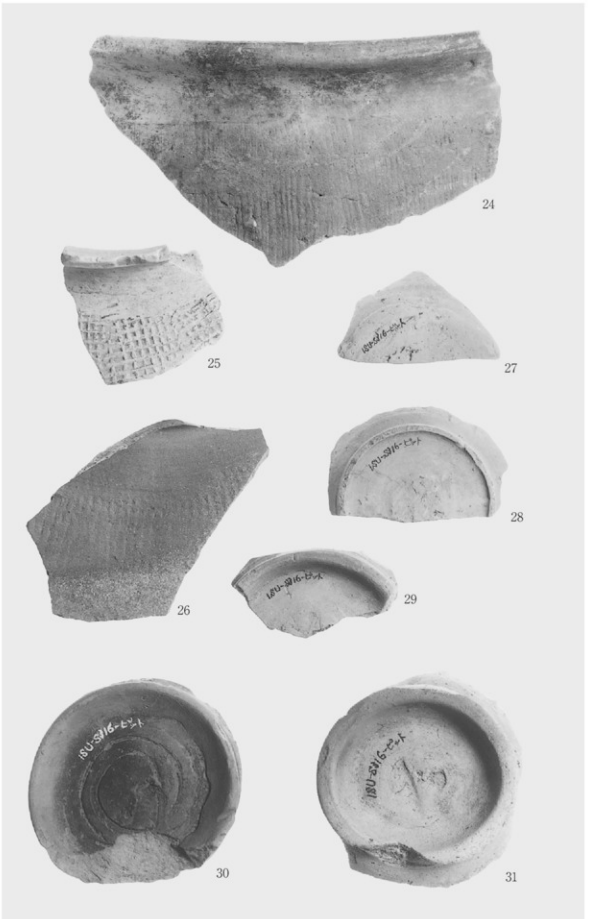


図版３　伊坂上原遺跡出土遺物（２）



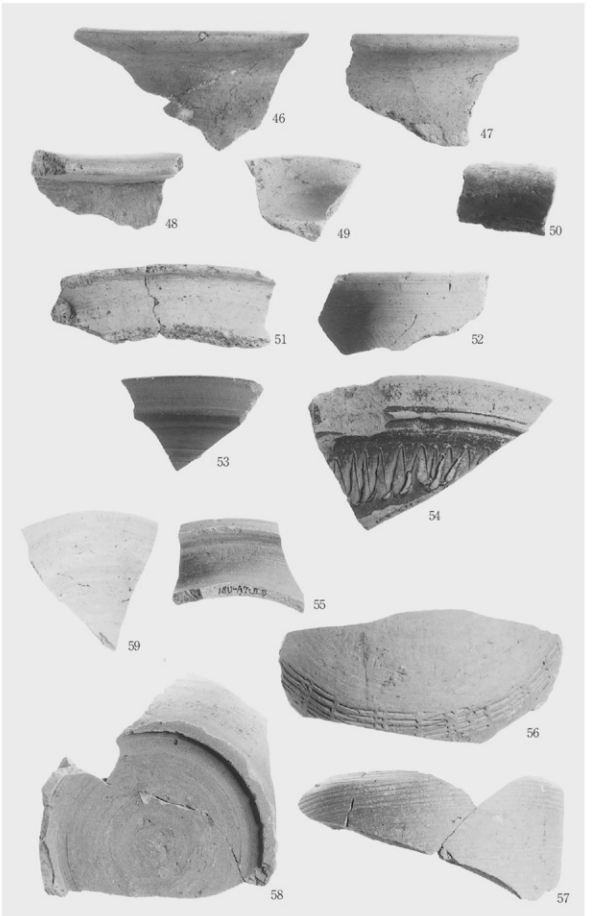


図版 4　伊坂上原遺跡出土遺物（3）

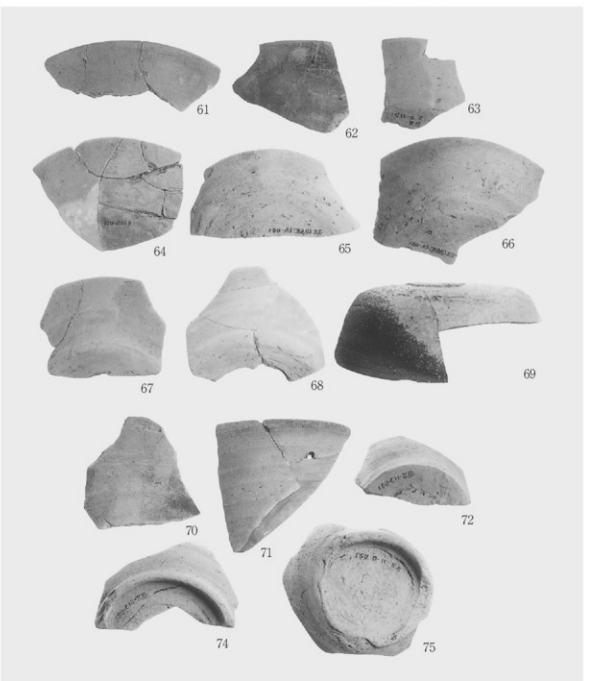


図版５　伊坂上原遺跡出土遺物（４）

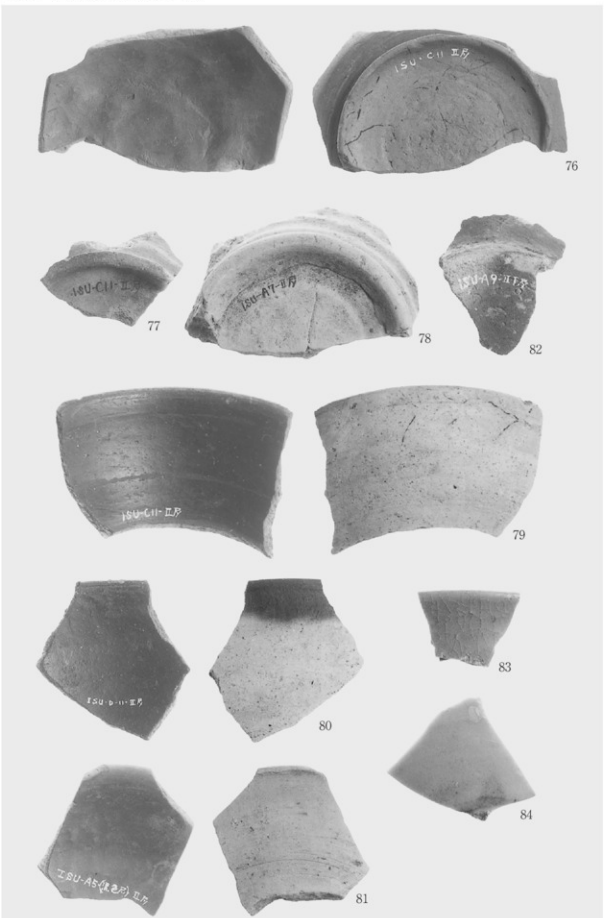
図版６　伊坂上原遺跡出土遺物（５）



図版７　伊坂上原遺跡出土遺物（６）



図版 8　伊坂上原遺跡出土遺物（7）



図版９　ワクド石遺跡

１　S001・002完掘状況（南東から）

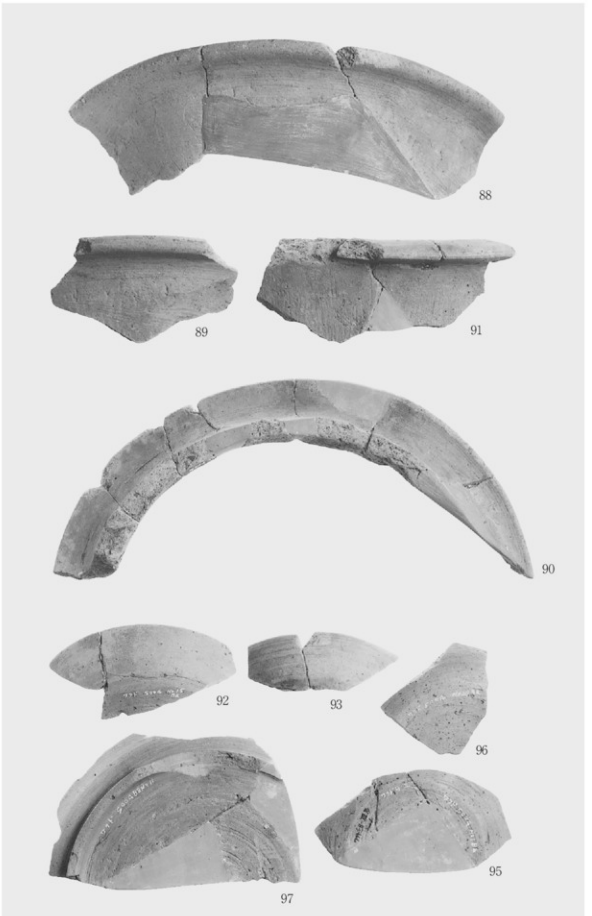
２　S003完掘状況（西から）

４　S004完掘状況（北から）

３　S004検出状況（東から）

５　S005検出状況（南東から）

図版10　ワクド石遺跡・出土遺物（1）



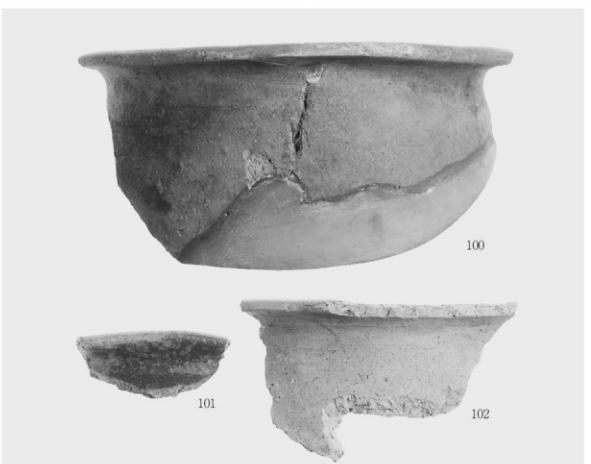
図版11　ワクド石遺跡・出土遺物（２）

94

98

94

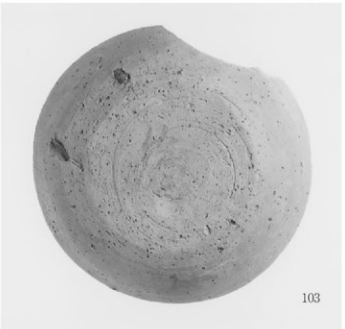
99

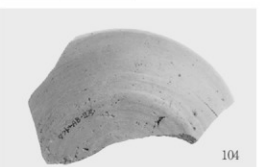

100

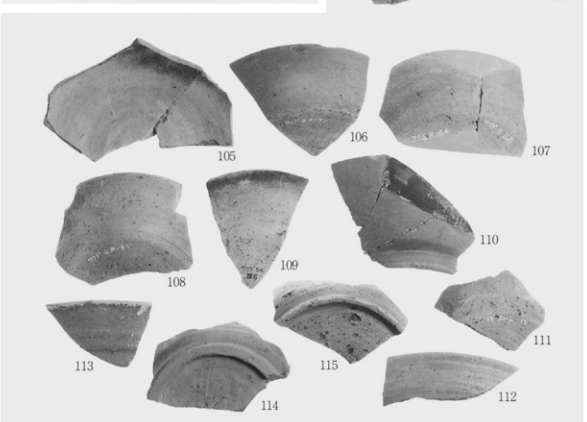
101

102

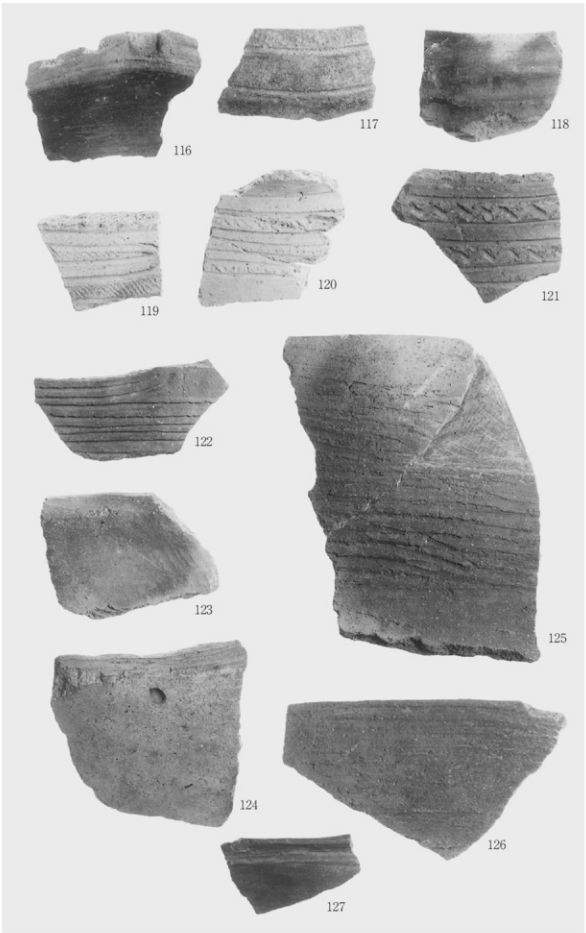
図版12　ワクド石遺跡・出土遺物（3）



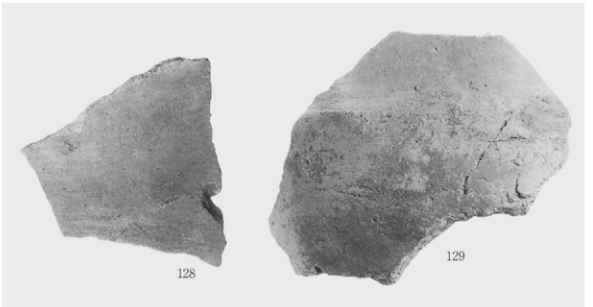




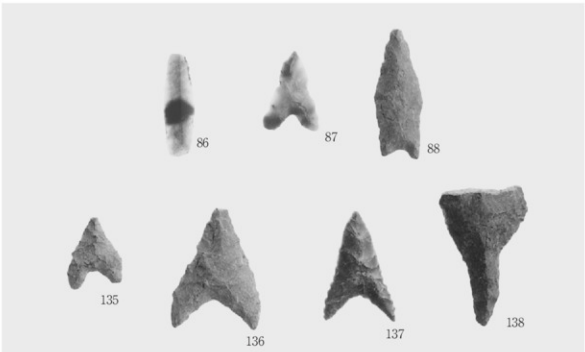
図版13　ワクド石遺跡・出土遺物（４）

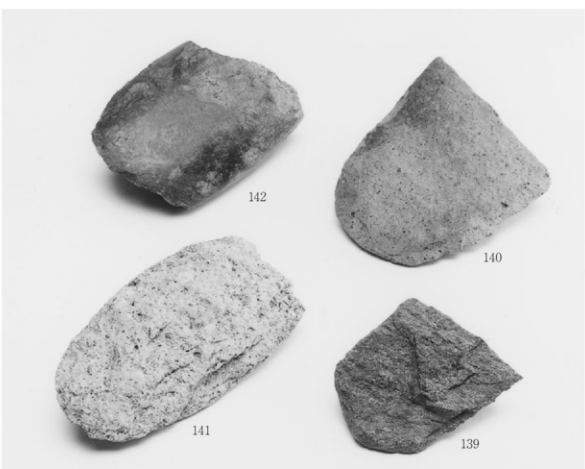


図版14　ワクド石遺跡・出土遺物（５）



図版15　伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡出土石器（1）





図版16　伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡出土石器（２）

143

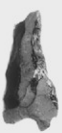
143

144

145

146

147


148

149

150

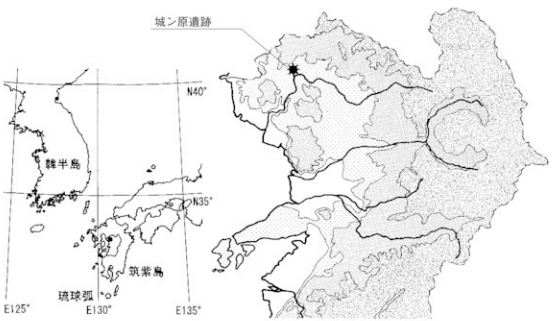
151

第Ⅱ部　城ン原遺跡

── 県道玉名立花線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ──

第Ⅱ部　城ン原遺跡

Section Ⅱ, Report of earthenwares had been used in the period from Yayoi to Asuka, excavated at Jounharu ruin located in Hirano, Mikawa Town, Kumamoto Pref., Japan.



平成15年３月

March　2003

熊本県教育委員会

Educational Association of Kumamoto Pref.

例　言

1　本書第Ⅱ部（本文）は、県道玉名立花線緊急地方道路整備事業に伴い、記録保存を目的として実施した熊本県玉名郡三加和町平野所在の城ン原遺跡の発掘調査報告書である。
2　城ン原遺跡の発掘調査は、熊本県教育委員会が調査主体となり、宮崎敬士（主任学芸員）及び堤英介（非常勤嘱託）が現地調査を担当した。
3　発掘資料の整理は、熊本県教育庁文化課文化財収蔵庫で宮崎がおこない、調査記録及び遺物の保管も同所でおこなっている。
4　本文は、宮崎が執筆した。なお、図版の作成にあたっては、文化財収蔵庫スタッフの補助をうけた。
5　本書第Ⅱ部（本文）は宮崎が編集し、本書の統括的な編集は後藤貴美子（文化財保護主事）が担当した。

凡　例

1　遺跡の実測図は、熊本県教育庁文化課の委託を受けて株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店が、平面直角座標第Ⅱ系に基づき作成した。なお、本文には縮尺1/800又は1/500にて収録している。
2　遺物実測図は、下記の者が作成した。なお、本文には、縄紋時代以前の石器：縮尺1/1、土器、その他：縮尺1/2にて収録している。
⑴　土器　宮崎
⑵　石器　新里亮人、宮本千恵子、芝康次郎、上野平優紀、松ケ野恵、斉藤伸太郎（以上、熊本大学考古学研究室）、宮崎
⑶　鉄器　宮崎
3　遺物実測図には、1から111までの通し番号を付した。本文の記述は、この通し番号に基づいている。

目　次

例言……68
凡例……68
目次……69

本　文

第１章　城ン原遺跡の概要……71
　第１節　調査の目的……71
　第２節　調査経過……71
　　１　開発部局との調整……71
　　２　発掘調査……72
　　３　発掘調査の組織……72
第２章　調査とその成果……73
　第１節　調査概要……73
　第２節　調査方法……73
　　１　グリッドの設定……73
　　２　基本層序……73
　第３節　出土遺構……74
　第４節　出土遺物……74
　　１　出土状況……74
　　２　縄紋時代以前の石器……76
　　３　弥生時代の土器……77
　　４　弥生時代の石器……81
　　５　時期不明の遺物……82
　　６　飛鳥時代以降の土器……82
第３章　分　析……84
　第１節　遺物の年代……84
　　１　縄紋時代以前……84
　　２　弥生時代……84
　　３　飛鳥時代以降……84
　第２節　遺跡の性格……84

挿　図

Fig. 1　城ン原遺跡周辺図 ……70
Fig. 2　調査区地形測量図 ……70
Fig. 3　グリッド配置図 ……73
Fig. 4　土層柱状図 ……74
Fig. 5　縄紋以前の石器実測図（剥片等）……75
Fig. 6　縄紋以前の石器実測図（石核等）……76
Fig. 7　弥生土器実測図（甕１）……77
Fig. 8　弥生土器実測図（甕２）……78
Fig. 9　弥生土器実測図（壺、高坏）……79
Fig. 10　弥生土器実測図（その他）……80
Fig. 11　弥生石器等実測図 ……81
Fig. 12　土師器・須恵器他実測図 ……82

付　表

Tab. 1　事前調整の経過一覧 ……71
Tab. 2　発掘調査の経過一覧 ……72

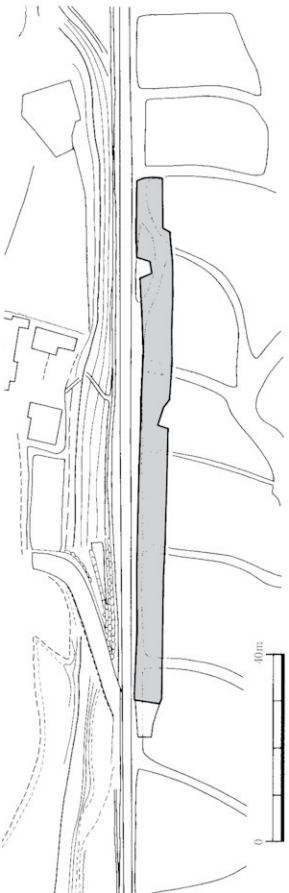


Fig. 1　城ン原遺跡周辺図

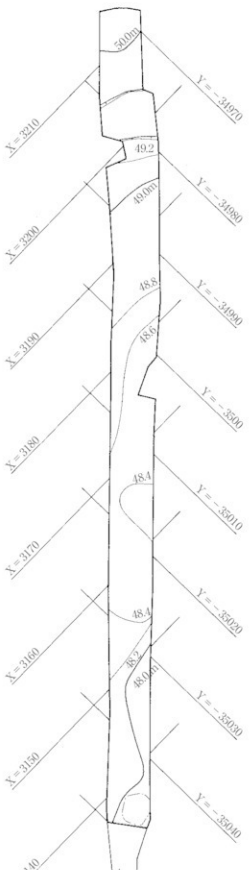


Fig. 2　調査区地形測量図

第１章　城ン原遺跡の概要

城ン原遺跡は、玉名郡三加和町平野に所在し、弥生時代の墓葬跡を主体とする遺跡である。

今回の調査範囲は、城ン原遺跡に含まれる玉名郡三加和町平野792－2他４筆であった。

なお、城ン原遺跡は、昭和43年に山鹿高校考古学部により甕棺数基が発掘調査された調査履歴を有するため、今回の一連の調査は第２次調査に該当することとなる。

第１節　調査の目的

熊本県が実施する県道玉名立花線緊急地方道路整備事業において、その工事範囲が城ン原遺跡に係ることにより、相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となるので、その記録保存をおこなうことを目的として発掘調査を実施した。

第２節　調査経過

１　開発部局との調整

熊本県教育庁文化課は、国及び熊本県が実施する土木工事等について関係部局に照会し、その回答に基づき遺跡地図との照合、現地踏査、試掘・確認調査等（以下、「予備調査」という。）を実施し、予備調査の結果に基づき、文化財の保護と公共工事の実施について開発部局と事前調整をおこなっている。

城ン原遺跡に係る事前調整の経過は、下表（Tab.１）のとおりである。

第１次確認調査では、遺構及び遺物は確認されず、この確認調査実施範囲は、開田前は沼地であるとの結果を得た。

続く第２次確認調査では、「溝」、「住居」、「柱穴」等の遺構及び弥生土器を検出し、この確認調査実施範囲には埋蔵文化財が存在するとの結果を得た。

上記の予備調査の結果に基づき、埋蔵文化財が確認された範囲（道路拡幅部分、総長120m）については、本調査を実施し、記録保存をおこなうこととなった。

なお、道路の拡幅・改修の場合の既存道路部分については、原則、これを調査対象としないこととされている。このため、今回の本調査では道路拡幅部分のみを調査対象とした。

Tab.１　事前調整の経過一覧

事　項	概　　要
遺跡地図照合及び現地踏査	平成９年６月13日付け教文第462号で教育庁文化課長から玉名土木事務所長あて、予備調査が必要な旨を通知
発掘通知（法第57条の３）	平成９年８月15日付け玉土第691号で熊本県知事から文化庁長官あて通知、９月18日付け三教社第623号で三加和町教育長から熊本県教育長あて進達、９月29日付け教文第1060号で熊本県教育長から三加和町教育長を通じ熊本県知事あて、発掘調査を指示
確認調査	平成９年７月３日付け玉土第691号で玉名土木事務所長から教育庁文化課長あて依頼 （第１次確認調査） 平成９年11月13日実施　担当：三木ますみ（学芸員）、中川裕二（非常勤嘱託） 平成９年12月15日付け教文第622号で教育庁文化課長から玉名土木事務所長及び三加和町教育長あて、調査結果を通知 （第２次確認調査） 平成10年７月15日及び８月24日実施　担当：帆足俊文（学芸員） 平成10年９月３日付け教文第937号で教育庁文化課長から玉名土木事務所長及び三加和町教育長あて、調査結果を通知

2　発掘調査

発掘調査は、熊本県教育委員会が調査主体となり、平成11年５月31日から６月30日までの期間に、現地調査を実施した。なお、現地調査終了後から平成13年３月31日までの期間に、随時、整理作業をおこなった。

城ン原遺跡に係る発掘調査の経過は、下表（Tab. 2）のとおりである。

当初は平成11年５月から発掘調査を実施する予定であったが、発掘調査予定地内に電柱（基幹線600V高圧線）が複数存在し、それらが調査区外へ移設された後に発掘調査に着手することとしたため、約１ヶ月のブランクを生む結果となった。

実際に発掘調査に着手した時期は、５月31日である。発掘調査の実施期間中は、作業員のみなさん、玉名土木事務所（当時）、三加和町、区長をはじめとする地元のみなさんの熱意と支援、及び天候に恵まれ、当初の予定のとおり６月30日に終了した。

なお、今回の発掘調査の位置をFig. 1に、調査区内の地形測量図をFig. 2に図示している（いずれもp.54に掲載）。

発掘調査の結果、出土品コンテナ２箱、写真、図面等の調査記録が採られた。これらの出土品及び調査記録は、熊本県文化財収蔵庫に保管されている。

現地調査終了後、熊本県文化財収蔵庫にて報告書作成に向けた整理作業を、暫時、おこなった。

3　発掘調査の組織

発掘調査の組織は、以下のとおりである。

【平成11年度】

主　体　熊本県教育委員会
責任者　豊田貞二（首席教育審議員兼文化課長）
総　括　島津義昭（課長補佐）
　　江本　直（主幹兼文化財調査第２係長）
調査員　宮崎敬士（主任学芸員）
　　堤　英介（非常勤嘱託）
作業員　有富孝至、井上洋子、牛島サワ子、
　　牛島ノリ子、内原ツワ子、内原弘子、
　　大塚勇伸、北原伸一、北原節、
　　北原幸典、酒見おのり、酒見光男、
　　富下キリ子、福山俊光、福山こずえ、
　　福山時江、福山京子、福山昭子
　　（以上、三加和町在住）

【平成11年度以降】

調査協力　黒田祐司（三加和町教委）
　　三加和町教育委員会
整理協力　堤　英介（益城町教委）
　　中村幸史郎（山鹿市立博物館）
　　前田軍治（山鹿市立出土文化財
　　管理センター）
　　山口健剛（山鹿市教委）
　　山鹿市教育委員会
　　㈱埋蔵文化財サポートシステム熊本支店
　　（順不同、敬称略）

Tab. 2　発掘調査の経過一覧

事　項	概　要
発掘調査依頼	平成11年４月19日付け玉土第1606号で玉名土木事務所長から教育庁文化課長あて依頼
発掘調査報告（法第98条の２）	平成11年４月23日付け教文第114号で熊本県教育長から文化庁長官及び三加和町教育長あて通知
発掘調査	平成11年５月31日から６月30日まで実施 担当：宮崎敬士主任学芸員、堤英介嘱託
文化財発見通知（法第98条の３）	平成11年７月７日付け教文第605号で熊本県教育長から玉名警察署長及び三加和町教育長あて通知
文化財譲与申請	平成12年３月24日付け教文第605号で熊本県教育長から文化庁長官あて申請 平成12年３月27日付け委保第31の８号で文化庁長官から熊本県教育長あて譲与通知

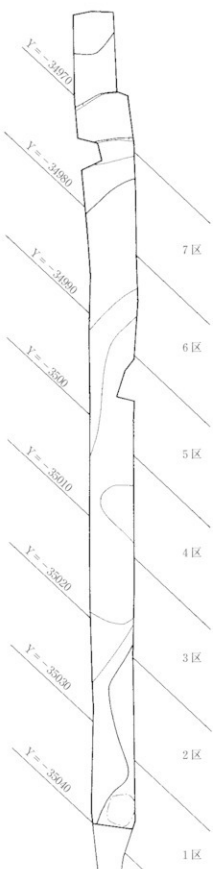


Fig. 3　　グリッド配置図

第２章　調査とその成果

第１節　調査概要

調査区のG.L.－1.4mのレベルに厚さ30cm程度の遺物包含層が存在した。この遺物包含層は、青灰色粘土層中に弥生時代中期から中近世までの土器片等を含む二次堆積層である。

なお、確認調査（第２次）で確認された「溝」、「住居」、「柱穴」等の「遺構」は、先の遺物包含層と上層の黒褐色シルト層又は下層の明灰色砂層とが、その界面において互層構造をとる箇所を遺構と誤認したものと考える。

第２節　調査方法

発掘調査は、グリッド調査法及び分層調査法に準拠して、以下のとおり実施した。

１　グリッドの設定

調査グリッドは、平面直角座標第Ⅱ系の南北軸を境界線として用いることとし、Y＝−35040を基線として東方へ10mごとに区切ることにより、当該調査範囲内に、１区から７区までのグリッドを設定した。

なお、各グリッドの東西方向の境界線は、調査区側壁である。

２　基本層序

基本土層は、概ね４層に大別できる。このうち第２層及び第３層が、埋蔵文化財包含層であった。

地表から地下に向かって、現耕作土及び田の床土、褐色シルト（砂混）、灰白色シルト（砂混）、青灰色シルト（粘質）が堆積していたが、ここまでは埋蔵文化財を包蔵していないため表土（第１層）として取扱い、重機により除去した。

第１層（表土）の直下には、軟弱な青灰色粘土層が30cm程度の厚さで堆積していた（第３層。出土遺物には「Ⅲ」と註記）。この第３層（青灰色粘土

層）は、弥生土器、須恵器、陶磁器等、遺物を包含している。

なお、調査区南部（１区及び２区の範囲）では、青灰色粘土層（第３層）の直上に軟弱な黒褐色シルト層が部分的に堆積していた（第２層。出土遺物には「Ⅱ」と註記）。この第２層は、弥生土器、須恵器、青磁及び陶器を包含している。

上記の遺物包含層（第３層）の直下以深には、青灰色砂層と青灰色粘土層とが、５cm程度の厚さで、互層構造をとりながら堆積していた（第４層）。この第４層以下は、埋蔵文化財を包蔵していないため、発掘調査対象から除外した。

上記の各層を土層観察したところ、第２層以下の層はいずれもしまりのない砂層又は粘土層であり、調査区が凝灰岩を地山とした丘陵を侵食した谷底部分に位置することから、水成堆積であるとの判断にいたった。一方、第１層の大部分は、谷底に田圃を造成する際の埋土（人工的な堆積層）であると理解している。

すなわち、自然堆積層は、第２層以下の層序となる。このうち、第３層より下部の層序は、いずれも堆積が５cm程度と薄いものであり、かつ層を構成する堆積物が他層に比して粗いうえ、規則的に互層構造をとっている。このことから、第３層より下部の層序は、梅雨等、季節的又は自然的な要因により定期的な堆積サイクルにより形成されたものと考えられる。第３層は、最も堆積が厚く、かつ層を構成する堆積物が他層に比して細かいため、比較的静かな水の作用によって長期間のうちに形成されたものと考えられる。第２層は、地表土壌（シルト）起源の堆積であることが明瞭であり、その分布も低標高側（調査区内南部）に限られることから、澱んだ水域に周辺崖面から土壌が崩落・混入した結果、形成されたものと考えられる。

第３節　出土遺構

今回の発掘調査では、遺構を検出していない。

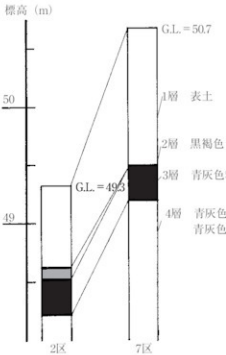


Fig. 4　　土層柱状図

第４節　出土遺物

遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器（青磁を含む）が、第２層（黒褐色シルト層）及び第３層（青灰色粘土層）から出土した。第３層からは、この他、石器20点（うち石包丁１点、石皿１点）、鉄器１点が出土している。

これらの出土遺物は、すべて、原位置あるいは原様式（組成関係）を喪失している。

１　出土状況

土器を主体とする各遺物は、いずれもローリングによる摩滅が著しく、完形又は完形に近い品を欠き、相互に接合する例は10例に満たないほど僅少である。また、同一層から弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器が出土している。これらのことと先述の基本層序の内容、そして出土遺構が皆無であることから、出土遺物は、すべて、流れ込み等の複次的な堆積作用を受けているものと考えられる。

すなわち、各遺物は原位置あるいは原様式（組成関係）を喪失しており、その一括性を検討することは困難である。したがって、既知の年代観に依拠し、

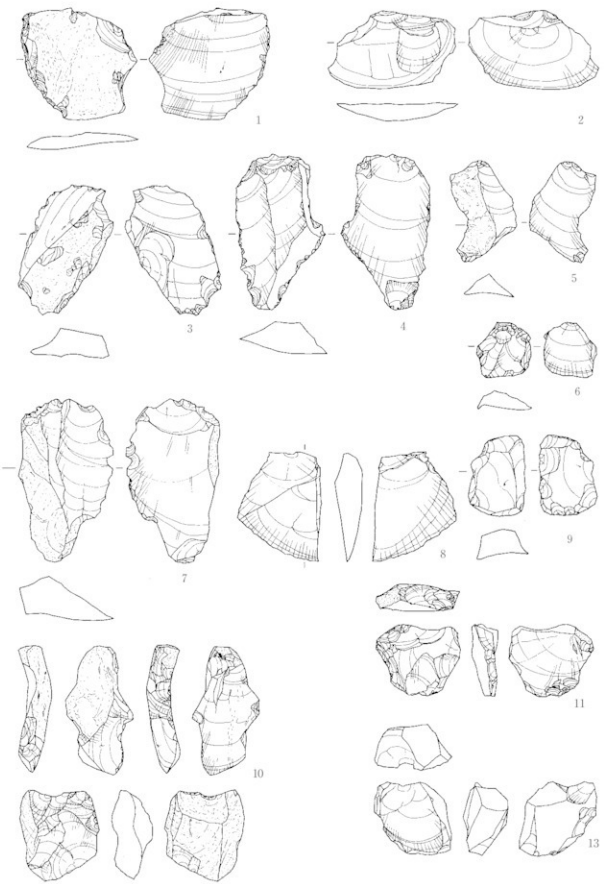


Fig. 5　　縄紋以前の石器実測図（剥片等）

各時代区分ごとに特徴的な出土遺物について、その概略を報告することとする。

なお、出土遺物の大半が小破片であり、適切な図示が適わなかったことを、あらかじめ述べておく。

2　縄紋時代以前の石器

縄紋時代以前の石器は、18点が出土している。

1～13は、二次加工剥片である。1、3～5、7～10は、縦長剥片を素材として、縁辺部に不規則なリタッチを施している。

2、8は安山岩を、その他は腰岳産の黒曜石を原石に用いている。

14～17は、石核であり、すべて腰岳産の黒曜石を原石に用いている。

14は石核たる明確な根拠が薄弱であるが、ネガ面で形成されている。

15は平滑な自然面を残し、打面を作り出し、側縁部を調整している。石刃を割り取るのは困難そうであるが、細石刃核の可能性がある。

16は細石刃核である。側縁部を両面とも丁寧に調整し、下縁部にも調整を施す。後、小口面から細石刃を剥ぎ出している。

17は細石刃核である。分厚い剥片を素材とし、主に背縁、下縁を作り出す調整を施す。後、打面形成のため、作業面側からスポールを取っているようである。最後に、小口面から細石刃を剥ぎ出している。なお、打面調整は施さない。また、頭部調整は入念である。

18は、腰岳産の黒曜石を原石に用いた、打製石鏃である。なお、ここでは、縄紋時代以前のものと判断したが、弥生時代後期においてもこのような打製石鏃は、鉄鏃とともに、存在する。

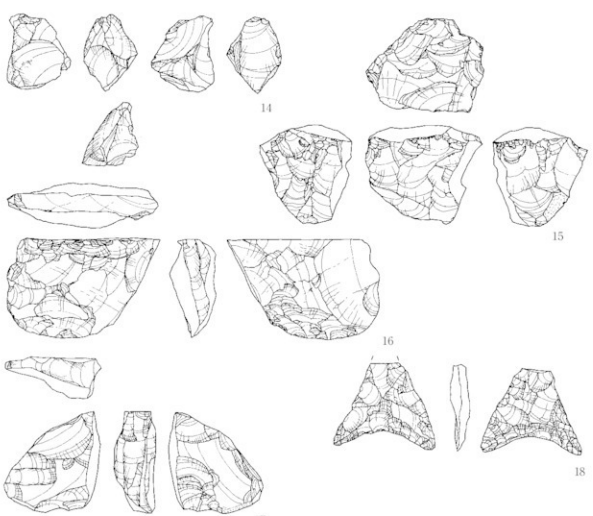


Fig. 6　　縄紋以前の石器実測図（石核等）

3　弥生時代の土器

弥生土器は、甕、壺、高坏、器台、坏及びジョッキ形土器が出土した。このうちには、赤彩土器が含まれている。

(1) **甕**（19～44）

口縁部では、鋤先型口縁が多く出土している（19～34）。この鋤先型口縁は、その肥厚の度合い、カエリ部の土器内側への突出程度、口縁部下面の鋤先基部と体部内面とが接する（土器内面）頚部の屈曲形状、及びカエリ部端部から当該屈曲部までの遠近から、以下のように整理することができる。

A　口縁部の外側への突出程度が大きく、屈曲部に明瞭な稜線を形成するもの。(19)

B　突出程度がAと比して小さくなり、屈曲部の稜線が弱まってくる。その一方で、口縁部が外側に大きく張り出す例、口縁端部が口唇部より上がることにより口縁部が内傾する例等も出現し、バリエーションが派生する。(20～23)

なお、断面三角形の厚い突帯を体部上端に付加することで口縁部を作り出す、中型成品系統の派生も認められる。(24、25)

C　屈曲部の稜線はBと同様であるが、カエリ部端部から当該屈曲部までの距離が短くなり、屈曲部が上方に形成される。口縁部全体が内傾するフォームが定着し、口縁部が厚い例が増加する。(26～28)

D　屈曲部の稜線は消失する。口縁部の内傾の度合いは、Cに比して急角度となる。(29～32)

なお、この特徴は、断面三角形の厚い突帯を体部上端に付加する中型成品系統においても同様である。(33、34)

その他の口縁部としては、いわゆる「く」の字型口縁部が出土している。(35～38)

「く」の字型口縁部は、いずれも頚部内面の屈曲が明瞭であり、

A　口唇端部に平坦面をもつもの（35、36、38）

B　口唇端部を丸く収めるもの（37）

とに大別される。しかし、調整技法、肩部の張り具

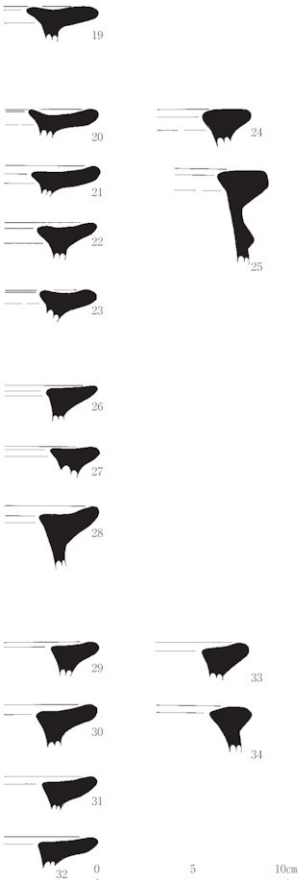


Fig. 7　弥生土器実測図（甕１）

合等を知りうる例に欠ける。なお、口唇部の断面形状から、以下のバリエーションが存在する。

a　頚部から口唇部まで、一様の厚さで伸びるもの。(35～37)

b　口縁部の中程で肥厚するもの。(38)

甕の体部形態を図示しうる例はない。

甕の底部には脚部が付加された例が多く、所謂「台付甕」の脚部といってよい。(39～44)

台付甕の脚部は、その形態から以下のように整理することができる。

A　脚部が中実のもの。(39)

B　脚部が低く、ほぼ垂直に立ち上がるもの。(40)

C　脚部が低く、外側に開くもの。(41)

D　脚部が高く、外側に開くもの。(42)

E　脚部が高く、大きく外側に開くもの。(43、44)

なお、39は甕棺底部の可能性がある。

また、42～44は、脚部に接する底部も広いものと考えられ、40、41に比して大型の成品であると考えられる。

(2) 壷　(45～69)

口縁部及び頚部の形態から、広口壷(45～50)が大半を占めるものと考えている。この広口壷は、頚部に断面三角形の突帯をめぐらし(45、46、48～50)、口唇端部に平坦面をもつ(45～50)例が多い。また、口唇端部の平坦面には、刻み目を施す例(45)も存在する。

その他の口縁部としては、頚部が「く」の字型をなし口唇端部を丸く収める例(51)、口縁部が「く」の字型に内折し口唇端部に平坦面をもつ複合口縁(52、53)、及び短頚壷(54、55)が出土している。また、頚部が外反しつつ立ち上がり、横位沈線をめぐらす例(62)も出土している。

壷の体部では、体部最大径付近に横位突帯をめぐらす例(56～61)が特徴的である。突帯断面は基本的に三角形であるが、以下のように整理することができる。

A　断面三角形のもの。(56、59)

B　突帯端部に平坦面をもつもの。(57、58)

C　突帯端部に平坦面をもち、刻み目を施すもの。(60、61)

なお、突帯端部平坦面の刻み目は、右傾(60)及び左傾(61)の二種が出土し、その浅深の程度は突帯端部の平坦面の広狭によって変化するようである。

壷の底部は、

A　丸底のもの。(63)

B　平底のもの。(66～69)

C　レンズ状に底部が湾曲するもの。(64、65)

とに大別される。丸底及び平底の底面(接地面)は丁寧なナデ調整が施されているが、レンズ状の底部では前二者に比して粗いナデ調整が観察される。

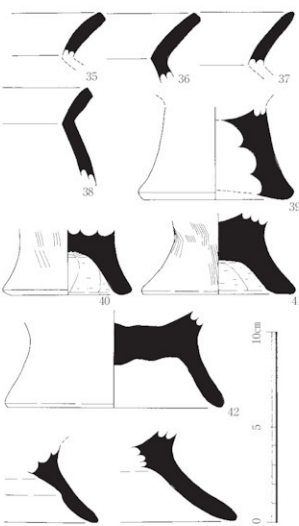


Fig. 8　弥生土器実測図(甕2)

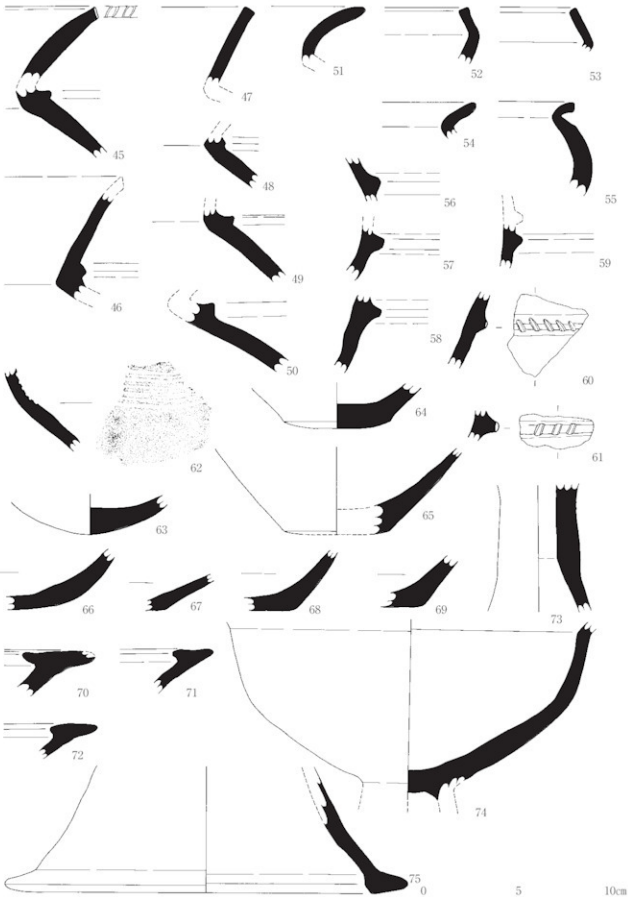


Fig. 9　　弥生土器実測図（壺、高坏）

(3) 高坏　(70～75)

高坏は、その脚部形態により、以下のとおり大別することができる。

A　中空の棒状脚部をもち、裾部がひろがるもの。(73)

B　坏部直下からラッパ状に裾部がひろがるもの。(75)

このうち、Bのラッパ状にひろがる脚部をもつ高坏は、近年、上益城郡嘉島町石塚遺跡、熊本市梅ノ木遺跡等で類例（完形品）が出土している。

口縁部は、鋤先型の口縁部（70～72）が出土している。高坏の口縁部は、口縁部の土器外側への突出程度、及び口縁部下面の鋤先基部と体部内面とが接する（土器内面）頚部の屈曲形状から、以下のように整理することができる。

A　口縁部の外側への突出程度が大きく、屈曲部に明瞭な稜線を形成するもの。(70)

B　口縁部の外側への突出程度がAと比して小さくなり、屈曲部の稜線もすこし弱いもの。(72)

C　口縁部の外側への突出が小さくなり、屈曲部の稜線も弱いもの。(71)

坏部は、図示できるものが一例のみ（74）であった。この坏部は、内面における頚部から底部までの深さ7.5cmを測り、深い坏部をもつ高坏と考えられる。坏部の断面は、その中位付近で緩やかに屈曲して立ち上がり、頚部は明確な稜線を形成して外折する。脚部は、坏部直下からラッパ状に裾部がひろがるもの（B、75と同様）と考えられる。

(4) 器台　(78)

器台と考えられる破片が出土している（78）。この破片は、壷あるいはジョッキ形土器の把手部分の可能性もあるが、その水平断面形態が真円に近いため器台として分類した。

器台は、器壁の厚さ0.7cmの筒型を呈し、体部は外反気味に立ち上がっている。その底部直径は7.1cm、器高は5.5cmを測り、体部外面にはハケメ調整の痕跡が観察できる。端部は上下とも平坦面をもち、端部厚は下端0.4cm、上端0.6cmであり、上端部のほうが若干肥厚している。

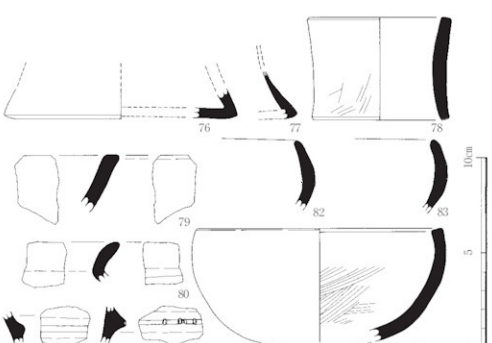


Fig. 10　弥生土器実測図（その他）

⑸　坏　（82～84）

坏は、いずれも口唇部が内傾し、底部は丸底を呈するもの（82～84）と考えられる。

82及び83は、口唇端部を丸く収めるものである。ともに体部上半１／３付近から口縁部が緩やかに湾曲し、内傾した口唇部を形成している。

84は、口唇端部に平坦面をもち、体部上半１／３付近から口縁部が緩やかに湾曲し、内傾した口唇部を形成している。口縁部直径は13.1cm、器高は6.3cm程度を測り、内面にはハケメ調整が認められる。

⑹　ジョッキ形土器　（76、77）

ジョッキ形土器の底部が２点（76、77）出土している。いずれも体部の下端部分の破片であり、板作りの底部から約30度程度の角度で鋭角に体部が立ち上がっている。体部は、下端から体部中半に向かって内湾し、後、上端に向かって外湾するものと考えられる。

76は、底部直径12.3cm、底部、体部ともに器厚0.5cmを測る。77は、小破片のため有効測定値をもたない。

なお、これらのジョッキ形土器は、複次堆積層から出土していることを、念のため申し添える。

⑺　赤彩土器　（79～81）

土器に赤彩を施した例を集めて、一項目とした。

79及び80は、壺の口縁部であり、内外面及び口縁端部全面に赤彩を施している。81は、壺の体部最大径直下にめぐらされた突帯部分であり、外面のみに赤彩を施している。なお、微弱ではあるが、突帯端部には刻み目が施されている。この刻み目と赤彩との切り合い関係は、土器片が磨耗しているため定かではない。

赤彩が施された部位は、口縁部（全面）、体部（外面）であり、土器の可視部分に赤彩が施されたものといってよい。

赤彩土器は、近年、出土例が増加し、熊本市権ノ木遺跡、阿蘇郡小国町地蔵原遺跡、玉名市前田遺跡等で良好なセット関係が確認されつつある。いずれの例も、不可視部分は粗雑な丹塗りである点で城ノ原遺跡出土例と共通している。類例の不可視部分の赤彩は、赤彩部と非彩部との境界を整えないままの粗雑な塗り方であり、所謂「なんちゃって丹塗り」と称してよい類のものである。一方、筑後川流域、佐賀平野、福岡平野等、北部九州地域では、先述の粗雑な丹塗りとは好照的に、精緻な丹塗りを施す例が多い。したがって、この所謂「なんちゃって丹塗り」は、該期の熊本県地域北半部に分布する弥生土器の様式標徴として用いることができる可能性が高いものと考えている。

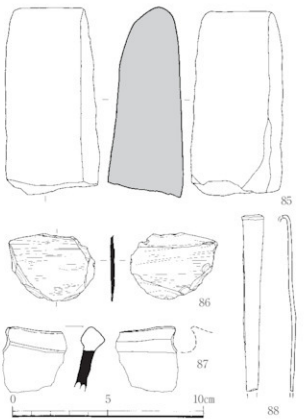


Fig. 11　　弥生石器等実測図

4　弥生時代の石器

弥生時代の石器は、石皿及び石包丁が出土した。

石皿は、安山岩の礫を上下両面とも摺面として利用したものの破片（85）である。各摺面は平滑であり、敲打痕や窪みは認められない。厚さは４cm程度である。

石包丁は、厚さ0.2cmに薄く割った粘板岩を、研

磨した後、縁辺部から円形に打ち割っている（86）。石包丁の作成途中で放棄された未成品と考えられる。

5　時期不明の遺物

形態からは時期を決定できない遺物が、2点出土している。

87は、土器の口縁部である。口縁端部を断面菱形に肥厚させ、突帯としている。口縁部は、波状を呈しているようであり、波状口縁の突端部には円形の抉り込みを施している。

88は、厚さ0.2cm、最大幅1.1cm、最小幅0.7cm、現存長10.4cmを測る板状の鉄製品である。その端部は直径0.4cmの円形に曲げ加工が施されているが、折損しているため詳細な形状が不明である。

6　飛鳥時代以降の土器

飛鳥時代以降の土器は、土師器、須恵器及び陶磁器が出土した。

土師器は、坏の類であり、高台をもつものと、もたないものとが出土している。このうち高台をもたないものに赤彩を施したもの（図示せず）がある。

須恵器は、坏蓋、坏身、高台をもつ坏部が出土している。

陶磁器は、青磁碗を含むが、近代以降の陶器も出土している。

⑴　土師器　（89～102）

土師器は、坏が主体を占めていると考えられ、その口縁部は、その断面形態から以下のように大別す

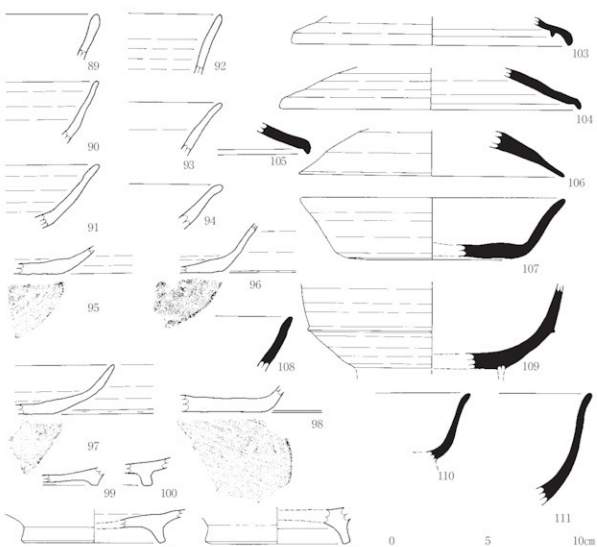


Fig. 12　　土師器・須恵器他実測図

ることができる。

A　口縁部が内湾するもの。(89～91)

B　口縁部が外反するもの。(92～94)

さらに、口縁部の湾曲度合いの強弱から、先の各分類ごとに、次のように整理することができる。

a　ほぼ直行するもの。(89、92)

b　やや湾曲するもの。(90、93)

c　湾曲するもの。(91、94)

坏の底部は、その形態から次のとおり大別することができる。

A　平底のもの。(95～98)

B　高台をもつもの。(99～102)

さらに、Aの平底坏は、その底部成形技法の種別により、次のように整理することができる。

a　輪積成形の後、ロクロナデを施し、回転ヘラ切りにより底部外面端部を整形するもの。(95)

b　ロクロ成形の後、底部をヘラ切りし、さらに底面をナデケシ、回転ヘラ切りにより底部外面端部を整形するもの。(96)

c　成形（手法不明）の後、底部を回転ヘラ切りし、後の調整を施さないもの。(97)

d　成形後、底部を回転ヘラ切りし、底面に強度のナデを一方向から施すもの。(98)

なお、Bの高台付坏は、細分するに足る大きさの破片資料をえることができなかった。101は高台底部直径7.6cm、102は高台底部直径7.7cmである。

また、図示するにはいたらなかったが、平底坏で、底部を回転ヘラ切りし、底面をナデ整形した後、その内外面に赤彩を施した底部破片が、１点出土している。

(2)　須恵器　(103～110)

103～106は坏（蓋）である。103は、直径14.8cmで、身受けのカエリをもつ。104は、直径16cmで、身受けのカエリがなくなり、蓋端部に身受溝をめぐらす。105は、直径不明であるが、104と同様、蓋端部に身受溝をめぐらす。106は、直径14.1cmで、蓋端部は丸く収める。

107～109は、坏（身）である。107は、器高3.3cm口径14.1cm、底径9.6cmを測り、口縁部が外傾する。108は、法量不明であるが、107と比して口縁部の外反が少ない。109は、底径7.7cm、現存最大径13.8cmを測り、体部下半に断面三角形の突帯をめぐらす。底面端部には、幅４mmの割れ面が全周しており、高台等がついていたものと考えられる。

110は、口縁部から体部の厚さ0.2cm程度であるが、底部に近づくにつれ肥厚する。器種等は不明である。

この他、複数の須恵器大甕（図示せず）が出土している。

(3)　陶磁器　(111)

111は、青磁碗である。花紋等の装飾を破片内に確認することはできない。

この他、白磁片、鉄釉がけした小破片、擂鉢片等、いずれも近代以降の産と考えられる陶磁器の破片が出土している。

なお、これらの陶磁器は、量的に最も少ない遺物であるが、第２層及び第３層の両包含層から出土している。

第3章　分　析

第1節　遺物の年代

各遺物について、既知の年代観に依拠し、各時代区分ごとに特徴的な出土遺物について、その概略を報告した。以下では、各遺物群の時期を求め、本文の結びとする。

1　縄紋時代以前

報告した石器群は、二次加工剥片と、細石刃核の少なくとも2時期以上の石器群が混在したものと考えられる。

細石刃核は、旧石器時代後期から縄紋時代草創期に、二次加工剥片（の多く）は縄紋時代に属するものと考えてよい。

2　弥生時代

これらの土器群は、黒髪式の特徴をもち、弥生時代中期に比定することができる。なかでも、台付甕には広がった脚部が、壺底部にはレンズ状底部が、甕口縁には「く」の字型口縁が多数含まれていることから、その主体を黒髪式の後半段階としたい。

なお、弥生土器群にはジョッキ形土器が含まれている。ジョッキ形土器に黒髪式土器が共伴するならば、その最古例となることに注意が必要である。爾後の調査では、ジョッキ形土器とその共伴土器を、層位学的に追及することが必要である。

3　飛鳥時代以降

土師器及び須恵器については、土師器坏、須恵器坏蓋等から、古墳時代の器種組成が途絶える飛鳥時代の所産とすることができる。

ただし、坏蓋の形式が身受けのカエリを指標としても3形式にわたることから、複数の時期（7世紀代全般）にわたるものと考えられる。

なお、青磁については、判断を保留したい。

また、近代以降の産と考えられる陶磁器の破片が含まれていることは、既述のとおりである。

第2節　遺跡の性格

遺物包含層である第2層及び第3層は、いずれもしまりのない砂層又は粘土層であった。このことと、調査区が凝灰岩を地山とした丘陵を侵食した谷底部分に位置することと併せて、当該層は水成堆積であるとの判断にいたった。

すなわち、遺物包含層は、自然堆積層である。

一方、包含層内の遺物についても、縄紋時代（後期～晩期）、弥生時代（中期後半）、飛鳥時代（7世紀代全般）及び近代以降の所産とできるものが、各層から混在して出土している。このことは、出土遺物は、すべて、流れ込み等の複次的な堆積作用を受けていることを示している。

また、調査区内における遺構は、皆無であった。

以上から、今回の調査区は、各時期の遺物が流れ込んだ区域であったものと判断する。

なお、第3層は、比較的静かな水の作用によって長期間のうちに形成されたものと考えられること。第2層は、澱んだ水域に周辺崖面から土壌が崩落・混入した結果、形成されたものと考えられること。そして、調査区より南西の地区において実施した予備調査（第1次）では、開田前は沼地であるとの結論を得たことから、調査区周辺の低地（田圃地域）は、古来、沼沢地であり、周辺の台地又は丘陵部に位置する遺跡から遺物が流れ込み、包含層を形成するに至ったものと結論する。

おって、近世以降の土器が、少量とはいえ、各遺物包含層に含まれることから、遺物包含層の形成時期は、近代以降である可能性が高いと推測する。

報告書抄録

ふりがな	いさかうえのはらいせき・わくどいしいせき・じょうんはるいせき
書　　名	伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡・城ン原遺跡
副 書 名	道路改築・整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第213集
編 著 者 名	後藤貴美子・宮崎敬士
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伊坂 上原	熊本県菊池郡 旭志村大字 伊坂	43402	016	32度 56分 04秒	130度 47分 43秒	20000824 ～ 20001107	約1200㎡	道路改良
ワクド石	熊本県菊池郡 旭志村大字 川辺	43403	002	32度 55分 00秒	130度 47分 08秒	20000904 ～ 20001109	約120㎡	道路改良
城ン原	熊本県玉名郡 三加和町大字 平野	43366	071	33度 01分 40秒	130度 37分 31秒	19990531 ～ 19990630	約800㎡	道路改良

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊坂上原	集落	平安	溝、土坑、炉、掘立柱建物、ピット	土師器（墨書土器）、須恵器	S57調査に続く２次調査
ワクド石	集落	平安	溝、土坑、炉	土師器（墨書土器）、縄文土器	H３調査に続く２次調査
城ン原	包蔵地	弥生・飛鳥	なし	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	S43調査に続く２次調査

熊本県文化財調査報告　第213集

伊坂上原遺跡
ワクド石遺跡
城ン原遺跡

平成15年３月31日　発行

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　シモダ印刷株式会社熊本支店
〒862-0951 熊本市上水前寺２丁目16-16

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第213集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：伊坂上原遺跡 ワクド石遺跡 城ン原遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
電話：096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015年12月8日